
届いてください

S E T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届いてください

【Nコード】

N6416T

【作者名】

SET

【あらすじ】

綾の自殺未遂によって、表面上はうまく回っていた高校生活が、友人の直、柚樹、聡美を巻き込み、崩れ始めた。四人の高校生がそれぞれの痛みを抱えて足掻く、青春長編。

00 プロローグ（前書き）

長編4作目です。よろしくお願いします。

00 プロローグ

「大丈夫？」

阪井直は、放課後、部活を休んで家に帰ろうとする飯原綾いいはら あやを呼び止めた。

三年生が引退して二ヶ月ほどが経った今、綾は、バスケット部の新キヤプテンを務めている。普段なら、風邪気味だからという、曖昧な理由で部活を休むことは、絶対にしない。他の部員からは、多少、煙たがられるほど練習に熱心だと聞く。

「ん？ 何が？」

最近まで女子校だったこの高校では、一日の終わりのざわつく教室の大部分を、女が占めている。その中で綾は、微笑みながら、首を傾げた。

「調子、悪そう」

朝、会ってからずっと、綾の様子がおかしいと感じていた。論理的に説明できるかと問われたら、いつもと雰囲気が違う、としか答えられないが、気になって一日中、目で追っていた。

「うん。風邪気味だつて言っただしょ」

「そういうことじゃなくて。精神的に」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

綾は鞆を肩に提げ、歩いていく。

「直」

教室を出て行く際に、人好きのする明るい笑顔で振り返り、手を振ってくれた。

「またね」

直は、釈然としないながら、本人が大丈夫と言っているのだからと無理に自分を納得させた。

だが、陸上部の練習に参加している間も、ずっと、綾の事が頭から離れなかった。練習が終わると、どうしても堪え切れなくなった。引越してから綾の家には、一回だけ、招待されたことがある。綾の話によれば、父親の暴力が酷いので、裁判をして別居することになり、綾の母親が知り合いから借りた家に移った、とのことだった。綾は、父に居場所を嗅ぎ付けられたくないから、直以外の誰にも、ここにすることは教えていない、というようなことを、言っていた。

自転車で住宅街の一角に辿りついたのは、夜の八時を少し回った所だった。冬の足音が聞こえてきそうな寒さが辺りを包み、陽が落ちるのは早い。だというのに、電気が点いている様子はなかった。直は玄関に立ち、インターフォンを鳴らした。反応はなかった。

風邪気味と言っていたから、眠っているのかもしれない。そう思い、玄関に背を向けかけたが、部活中からずっとまとわりついてくる茫洋とした不安が、足を止めさせた。

五回、インターフォンを押した後で、玄関扉の取っ手に、手をかけた。

……大丈夫。自信を持て。何年、綾の友人をやってきたと思ってる。

鍵はかかっていたいなかった。取っ手を引いて入ると、まず、異臭。靴から、部活で使ったタオルを取り出し、鼻にあてた。こんな臭いの中で、生活しているのか、綾は。

靴を脱いでフローリングに足を載せた。確かすぐ右側に、途中で直角に折れ曲がった、二階へ上る階段がある。そこを上る綾についていき、部屋に案内されたのは、半年近く前だったか。微かな記憶を頼りに、階段の上り口にある電気のスイッチを押した。天井にぶらさがっている電灯に明かりが点いた。

照らされた玄関近くは、物という物で溢れ返っていた。ごみの袋がいくつもいくつも転がっている。臭いの発生源の一つは、恐らく、

これだ。

「綾、いるの？」

階段を上りながら名前を呼ぶが、返事はない。心臓の音が慌ただしい。どうしてだろう。根拠なんて、何もないのに。

二階についてすぐ左に折れ、廊下を少し歩くと、ドアに突き当たった。ノックする。返事はない。ごめん、綾、と心の中で呟きながら、そのドアも開ける。

綾の部屋は、真っ暗だった。酒くさい。階段の電気をつけた時と同じように、手探りで、電灯のスイッチを探した。どうにか見つけ、押す。

「綾？」

綾は、部屋の中央にある、こたつ机に、身体を突っ伏させていた。思わず眠ってしまったという格好だった。

なんだ、と軽く息を吐いた。途端、根拠もなしに勝手に家に入ってきたことが、とてつもなく失礼なことに思えてきた。……どうしよう。明日、謝れば許してくれるかな。そう思って、もう一度、綾を見る。

突っ伏した綾の頭の向こうには、ビールの缶が何本か置いてあった。そして足もとには、見慣れない薬剤の包装紙が散乱している。いくつかの錠剤が入っているらしいそれを、拾って、名前を見た。母が、医者に処方されているものと、同じ錠剤だった。先程、息とともに吐き出した不安が、また、沸き上がってきた。

「綾」

拾った薬剤を床に放り、綾の体を揺すった。何度か揺すっても、起きる気配はない。

直は、綾の体を強引に引き起こした。左手で綾の首を抱え、目を閉じたその顔に、右手を近づける。鼻に目一杯近づけても、微々たる風量しか手に感じられない。

「綾！」

綾の頬を強く叩く。

「からかつてるなら早く起きて、綾！」

しかし、起きない。

体から血の気が引いていく。その表現通りの悪寒が、全身を貫いた。

呼ばないと。

……何を？

「き、救急車っ！」

綾の体を床に横たえた直は、持っていた鞆のファスナーを全開にし、逆さまにした。鞆を激しく振った。文房具や部活用品に混じり、鈍い音を立てて床に落ちた携帯電話を拾い、開く。

「何番だっけ。何番だっけ。何番だっけ！」

携帯電話を、苛立ちとともに揺らす。

そして十秒くらい考えたあと、ようやく頭に思い浮かんだ一一九番を押して、発信した。

01 楽になりたかった

目が、覚めてしまった。薬は限度をはるかに超えて飲んだはず、アルコールを飲んで薬の回りが異常に早くなっていたはず、母は夜勤のはず。

なのにどうして。

綾はゆっくりと開けた目で、今自分がベッドに横たわっていることを確認した。仕切りのカーテンに、ぐると取り囲まれている。仕切りがあるなら、個室ではない。点滴以外、特別な医療器具がついていないということは、軽症。

母は、翌日の午前十時にならないと帰って来ない。父はどこにいるかも分からない。そのうえで、薬を飲む際の注意事項に大きく反することを、実行した。朝まで誰にも見つからないで放置されれば、死ねた。死ねたはずだ。色々なウェブサイトを見て回ったが、急性薬物中毒は、発見が遅れれば遅れるほど、重篤な症状に陥る傾向にあるという話だった。

軽症。死ねなかったという事実が、徐々に、現実として認識されていく。

そこで、カーテンが突然開けられた。

「綾？」

髪の毛がほつれ、目もとに濃い隈がある。マスクをしていたせいで、一瞬、誰だか分らなかった。

よく見れば、母だった。

マスクを取った母は、点滴してあるのとは逆の、右腕にすがりつくようにした。そこへ額を押し付け、しばらく、動かなかった。

「よかった」

母は、そう囁き、嗚咽を洩らし始めた。

そんな母を見て、特に意識をすることもなく、涙が出てきた。点滴の針がついた左腕を持ち上げ、両目に押し付けた。

「ごめん」

そうとしか、言えなかった。

ちゃんと死ねなくて、ごめん。

どうして、生き残ったのだろう。自分が死ねば、母は、自由になれたのに。

少し考えてから、それは独善か、と思い直した。

自分が、楽になりたかった。

薬の効果が抜けきらず、ずいぶん眠ってしまっていたらしい。

木曜日に自殺未遂して、目覚めたのは土曜日の夕方だった。その日のうちに退院手続きが済んだが、翌週はまるまる学校を休んだ。

学校へ行くことになったのは、翌々週の月曜日から。母はもうしばらく学校を休むことを提案してくれたが、それはやめておいた。直はきつと、自殺未遂の事について、黙ってくれているだろう。失敗してしまったのなら、話が大きくなる前に、これ以上母に迷惑をかけないように、日常へ戻らなければ。

居間のテーブル近くの床には、すでに母が座っていた。トーストをかじりながら、朝のニュース番組を見ている。

母はあれから一度たりとも、自殺の理由を問い質しはしなかった。かといって、娘が自殺未遂したという事実を、なかったことにするわけでもない。ぎこちない部分を隠さず、接してくれることが、今はひたすら、有り難かった。

「綾」

「ん？」

「クラスメイトの阪井さん。あなたからも、しっかり謝っておいてね」

「わかってる。何回も、聞いているよ」

「通報が早かったから軽症で済んだと、お医者様には言われたわ。阪井さん、綾が倒れた翌日は、学校を休んで、ずっと病院にいてくれて。お母さん、心細かったから、とても助かったのよ。警察の事

情聴取にに応じてくれたり、とにかくご迷惑をおかけしたんだから、とにかく謝りなさい」

あれから十日が経ったいまも、直とは、一度として連絡を取っていなかった。

どう、感謝の気持ちを伝えればいいのか、分からない。今はまだ、感謝だけでなく、余計な事をしてくれた、という思いもある。相談もせず勝手に自殺未遂の騒動を起こしたことに對する申し訳なさもある。この、自分でも把握しきれない感情の海に溺れたまま連絡を取れば、理不尽な八つ当たりをして、関係を壊してしまうかもしれない。怖くて仕方なくて、電話をかけることなんて、とてもできなかった。先週は毎晩、携帯電話を手に持ったまま布団に潜り、身を丸めていた。

自分の分のトーストを焼き、マーガリンを塗った。今日からは、生き残った間抜けな身体を引きずって、日常を再開させなければならぬ。焼いたばかりのトーストを早々に食べ終えて、その場に根を張って動かなくなりかけた身体を、奮い起こした。

……逃げるな。自分の行動の結果には、自分で責任を取れ。

父親を反面教師として生きてきた綾は、今日もまたそう自分に言い聞かせ、朝の身支度を済ませた。

風邪をこじらせたということにして、何食わぬ顔で教室に入り、いつものように毎日を過ごす。そんな絵図を描いて、綾は、家を出た。

綾の通う学校は、市街地の中心部にある。校舎は小高い台地の上に建っているので、長い勾配をもつ坂が、通学路になっていた。自転車で通っている綾は、その坂にさしかかった辺りから押して歩く。その長い坂の両端には、銀杏の木が植えられている。鮮やかな黄色の葉が、風に揺られて舞い踊る中、綾は自転車を押し続けた。

裏門から入り、体育館の裏手にあたる駐輪場に、自転車を停めた。いつもは、体育館で朝練をこなしてから、直接、教室に向かう。体

育館を視界に入れながら、三階にある教室に向けて歩くのは、あまり慣れない。十日ぶりに見た体育館は、どこか、よそよそしかった。下駄箱で上靴に履き替えていると、クラスメイトの女子がやってきた。友人というほどではないが、それなりに話はするので、おはよう、と挨拶をした。しかし女子は、綾の足元を見たまま歯切れの悪い挨拶を返してきて、そのまま、先に教室に行ってしまった。少し不安になった。だが、直が誰かに言うはずがない、と考え、綾はその女子の背中を見つめながら、教室に向かった。

二年一組の教室の扉の前で、一度、深呼吸をした。開ける。音に反応した、何人かの女子が、こちらを見た。しかし一様に、ぎこちない動作で視線を逸らした。

綾は嫌な汗が滲み始めたのを感じながら、鞆を机の脇にかけた。教室を見渡すと、いつも一緒に昼食を食べている三人のうち、一人だけ、既に来ていた。あおの ゆずき青野柚樹。柚樹は綾と同じバスケット部の一員で、ベンチ入りも怪しい実力だが、練習には決して手を抜かない。物事に対してどこか冷めていて、あまり愛想のいいほうではないけれど、キャプテンという慣れない立場の自分を、さりげなく補佐してくれる。

「柚樹」

顔を伏せていた柚樹に、机の正面から声をかける。柚樹は大儀そうに、綾を見上げた。

「ごめんね、何日も休んで。練習、大丈夫だった？」

柚樹は端正な双眸を細め、それから逸らした。返事もない。

眠りを妨げたことに対して、怒っているのだろうか。

「起こしちゃったみたいだね。また、後で」

しばらく経っても反応がなかったので、綾は、諦めて、立ち去るうとした。

「よく、平気でいられるね。周りの迷惑も知らないで」

「えっと……何の、こと」

振り返りざま、自然に、笑みが零れてしまう。自分でもわかる、

相手に媚びようとする、卑屈な、笑み。

「何、笑ってんの？」

どきりとするほど、冷たい声音。今までにも、不機嫌な柚樹に接したことがあったが、その比ではなかった。

一瞬にして、羞恥に頬が染まるのを感じた。笑みを消し、柚樹の席から離れる。

綾の席は、真ん中の列の左側、前から三番目にあつた。周りの視線から逃れる事の出来ない、席。

——何、笑ってんの？

席に戻ってから、同じ言葉がずっと、頭の中をリフレインしていた。早くホームルームが始まってくださいと祈りながら、ぎゅっと目を閉じていた。

「よかつたな、無事で」

連絡事項を伝えるためにやってきた担任が、開口一番、そう言った。いつもは担任が注意してもお喋りが止まず、賑やかなはずの教室は、静まり返っていた。担任の声が、やけに大きく、響いた。

咄嗟に返事が出来ず、黙って、頷いた。

「辛いことがあつたら、なんでも相談しろよ？」

優しいな、笑み。

綾は、全員の前で、晒しものにされたような気がした。また、顔が熱くなつていくのを感じた。平常心でいようと思えば思うほど、留めようがない。

一言目はともかく、二言目は、病欠明けの生徒を氣遣った言葉じゃ、ない。そして、ホームルームの時間の頭に、わざわざ言った。全員、知っているんだ。自分が、自殺未遂した事を。

クラスの人には、黙っておいてくださいと……あれだけ、頼んだのに。あれだけ、頼んだのに！ 憎しみ込めた目で担任を睨もうとして、ふと、気付く。担任じゃない人間も、知っていた。教室の後ろの入り口のほうを見遣る。

目が合うと、直は、まず驚いたように目を見開き、その後で、こちらを睨み返してきた。

綾は一瞬にして自分の失態を悟り、すぐさま、担任へ視線を戻した。

いまのタイミングで見たりすれば、あからさまに「直が言ったの？」と疑いを向けているようなものだ。体調が悪そうという理由だけで、家にまで、見に来てくれた友人に対して。学校を休んでまで、病院に付き添ってくれた人間に対して。

担任は、こちらの返事を待っているようだった。

静まり返った教室が、恐ろしかった。早くこの時間が、過ぎ去ってほしかった。

「ご迷惑、おかけ、しました」

どうにかそう絞り出し、周囲の視線から逃れるため、顔を俯かせた。

02 立ち尽くす

「私の事、疑ったでしょ」

一時間目の授業が終わってすぐ、綾の近くにやってきた直は、不機嫌な声で、言った。

凶星だったが、慌てて首を横に振った。

「すぐ分かる嘘、つかないで」

「う、嘘じゃ……」

「昼休み、空けておいてね。話があるから」

直が席に戻ってから、綾は、自分の席でじっとしていた。いつもだったら周りの女子と他愛ないおしゃべりをして潰す休み時間なのに、何をどうすればいいのか分からなかった。何か声をかけようとするたび、朝、下駄箱で会った女子のことが頭によぎった。なんだけだ迷惑そうだった、それだけのことなのに、誰かに口を塞がれているような感覚が、ずっと、ついてまわった。

結局、昼休みまでに会話を交わしたのは、直と柚樹だけで、他は、こはやかわ さとみ小早川聡美が優しく挨拶をしてくれただけだった。

昼休みになり、綾と直は、いつも昼食を食べる四人のグループのひとり、聡美の机に集まった。教室の左隅。綾と聡美は弁当を広げ、直はコンビニで買ったと思いきパンを取り出した。

今日は、一人、足りない。柚樹が、違うグループと食事を共にしていた。

「ゆず」

聡美が柚樹を呼んだ。しかし柚樹は、聡美の呼びかけを無視した。「綾。初めに言っておくけど。今回のこと、無事では済まないと思うよ」

直は、険しい目つきで柚樹のほうを睨みつけながら、呟いた。

「綾がいけない間ね、綾に対するいじめがなかったか、頭の回らない教師たちが聞き取り調査、したの。クラスでも、バスケット部でもね。」

何もしてないのに疑われたから、何人かは反発して、蔵本とか、安井とか、あの辺のグループが、綾のこと、嫌い始めてる。綾が休んでる間、陰口も結構聞いた」

「直、そんなあからさまに……」

「変に隠したってしょうがないでしょ。事実なんだから。柚樹も同じ。あいつはああいう奴だったんだよ」

「綾、ゆずは、違うよ。ゆずは、綾のこと、嫌ったりしないよ」

聡美は、直ではなく、綾に向かって、言った。

聡美と柚樹は、よく一緒にいる。聡美は、美術部で絵ばかり描いていて、身だしなみにも特に興味がない。加えて運動も勉強も人並外れて不得意だから、ときどき、柚樹は聡美のことを馬鹿にしている節もある。ただ、大らかな聡美はそれを知っていても気に留めないし、柚樹も自分から進んで一緒に過ごす事が多いのだから、仲はいいのだろう。

「うん。分かってる。でも、もし嫌われたとしても、僕に原因があるんだし、気にしてないよ」

自分のせいで、柚樹は怒っている。自分が自殺企図なんてしたせいで。

あの冷たい声音を、思い出す。今は取り付く島がなさそうだが、そのうち、仲直り、できるのだろうか。

「またそうやって、優等生ぶる」

直は苛々を滲ませた言い方をして、メロンパンの包装を破り捨てた。

直の言葉があまりに的を得ていたので、綾は何も、答えられなかった。

そう。家でも学校でもいい顔をしようとして、自滅したんだ、自分。ぐちゃぐちゃしたわけのわからないものを、後生大事に抱きかかえながら、それと一緒に心中しようとした。

いつもだったら、柚樹と一緒に向かう部室には、一人で、向かつ

た。

部室では既に、何人かの部員が着替えていた。振り返った部員の一人に声をかけようとしたが、すぐに顔を背けられた。開きかけた口を、黙って閉じる。また、顔が熱くなる。誰にも見られていないのに、耐えられないくらい、恥ずかしかった。

自殺未遂したことを、周りの人間のほとんどに知られていると言うのは、本当に、恥ずかしい。呼吸をして、日常の生活を営んでいることそのものが、自分の不始末を四六時中、曝け出しているようで、人の顔がまともに見られない。誰も自分の事なんて気にしてない、と思いたいが、やっぱり、今までとは、空気が、違う。

新キャプテンという立場もあり、このところ、部員とは、広く浅く、付き合ってきた。うまくやれていた自信があった。それをわざわざ、自分で壊した。

誰とも喋らずに制服を脱ぎ、膝丈までの黒ジャージを履く。汗止めの細いヘッドバンドをつけ、白いＴシャツの上から、練習用のビブスを被った。背番号は四番。最後に、バッシュへと履き替えた。

体育館を使う部活は、バレー部と、男女のバスケットだけだ。バスケットは男子と女子で、それぞれハーフコートに分け合っている。バスケットとバレー部とは、網目の大きめな薄緑の防護ネットで区切られている。防護ネットは、体育館のちょうど中央で区切ることができる。簡単なレバーを操作し、三つの部の一年生たちが日替わりでネットを引いておくのが慣例だ。

正面の入口もちょうど半分に分断する防護ネットを押し退け、中に入る。

すでに柚樹は来ていた。他の部員と話している。不意にこちらを見たと思うと、他の部員と共に笑いあった。なんだか自分が笑われたような気がした。

誰にも聞こえないように、柚樹、と呟いた。それから、マネージャーが来て練習予定をホワイトボードに書き込むまで、ずっと一人で、立っていた。

練習は、どの部員も、身が入っていなかった。休憩時間はきちんと設定されているのに、練習のあいだもずっと、喋っている女子がいた。しかも、一年生の手本になるはずの、二年生。それまで真面目にやっていた一年生にも、その空気が伝播した。

「ちよっと、澤山、いつまでも喋ってないで。一年生、見てるよ」しばらく様子を見ていたが、あまりにも練習そっちのけで私語を続けるので、綾は注意した。

普段は不服そうに口を尖らせて練習に戻る澤山が、今日は、綾の言葉がまるで聞こえていないかのように、喋り続けた。視線すら寄越さない。

「タイマー、止めて」

マネージャーに言って、基礎体力を養う練習を、中断させた。

綾にとって部活は、多少なりとも本音を吐き出せる、唯一の場所だった。あくまでも部活なので、練習を強制するわけにはいかないものの、練習の邪魔をする人間には、強く注意してきた。同学年にしっかり注意することが出来るから、新キャプテンに選ばれたとも思っている。そのため、ふざけてばかりの澤山たちとはあまりそりが合わない。

「お願いだから、静かにしてよ。練習する気分じゃないなら、早退していいから」

澤山たちは、体育館のステージに座り、喋り続けている。

「ねえ！」

全くの、無視。

ふと、視線を感じて、周りを見回す。

騒いで練習を邪魔しているのは澤山たちだったが、なぜか、綾に視線が集中していた。

「え……なに？」

思わず、誤魔化すような苦笑を零してしまう。

途端、呆れたような視線が、綾の全身に突き刺さる。いつもだったら、白い目を向けられるのは、澤山たちのほうなのに。

誰も何もが動かず、澤山たちの声だけが聞こえる。時間が止まったような錯覚を覚えた時、柚樹が、こちらに向かつて歩いてきた。「練習、再開させて」

柚樹は、綾の横を通り過ぎ、マネージャーにそう言った。

マネージャーは頷き、タイマーの一時停止を解いた。

練習が、再開された。喋り続ける澤山たちと、立ち尽くす綾を置いて。

後片付けが終わった後も、体育館に残った。

居残り練習をするのは、良くあることだったので、誰も疑問には思っていないようだった。というよりも、まるで綾のことはどうでもいい、といった風情が、部員の間に蔓延していた。

自殺を試みたことによつて、少しは浚われたかに思えた澱みが、また底に沈み始める。澤山がきつかけで泣くのは絶対に嫌だったので、折り畳まれたバスケットボールの下で、床と目を合わせ続けていた。革張りのバスケットボールを、手もとでいじる。

「なあ」

ああでもやつぱり、駄目かもしれない。泣こうか。そう思った所で、右斜め後ろから声がした。

驚いて振り返ると、綾の居る場所から一番近い出入り口に、男子バスケット部の部員、芝原^{しばはら}一浩^{かずひろ}が立っていた。この学校で、一割にも満たない男子の一人。

「今日、ワンオンワン、やるか？」

「ううん。遠慮、しとく」

「そっか」

バスケット部の中で、居残り練習をするのは、この芝原と、綾だけだ。基本的にはお互い、不干渉でそれぞれの練習をやっているが、仕上げるに、一対一の勝負をすることがある。綾は百六十三センチで、芝原は百七十センチ。身長差も控えめで、高校からバスケットを始めた芝原には技術の甘さもあるから、一応、勝負にはなった。

「男子のほうに來ればいいのに。男子に交じっても、飯原なら、出来るよ」

男子とはハーフコートに分け合っている。今日のちょっとした騒動も、見ていたんだろ。女子部員全員がよそよそしい態度を取っていたことを考えると、きっと、芝原も、自殺未遂のことを、知っている。

芝原にまで、知られているんだ。そう思うと、情けなくなって、恥ずかしくてたまらなくなつて、我慢していた涙が零れそうになつた。

「部があんな状態になつた理由、後で、聞かせてもらつていい？ 根本的な原因は、分かつてるけど」

綾はボールを掴んで、扉が開いたままの用具入れに放つた。

「ごめん、後片付け、お願いね」

そのまま芝原の顔を見ずに、家へ逃げ歸つた。自転車を漕ぎながら、目元を何度か拭つた。

03 眠れない

夕食は、作り慣れたカレーにした。多めに作っておいたので、明後日までは使い回しができる。

米を研いで炊飯器にセットし、ついでに冷やしておいたタオルを、手に取った。カレーの入った鍋に蓋を被せ、台所の電気を消す。台所と繋がった居間の、隅にあるソファの上に、寝転ぶ。膝を立てて楽な姿勢になったあと、タオルを目に被せた。冬に近い寒さが部屋を支配しているので、気持ちよくはない。肌寒さが増したただけだ。

直だって、聡美だって、こんな自分の味方でいてくれる。自殺原因がいじめにある、と決めつけた方法論のまずさには憎しみすら抱いたが、教師だって、優しい言葉をかけてくれた。学校中のすべてが敵に回ったわけではない。こんな状況で泣くなんて、甘えてる。

こんなことで泣くくらいなら、最初から、自殺企図なんてしなればいい。それか、苦しくても確実に死ぬ方法を選べばよかったのだ。自殺のための方法も甘えなら、生き残ってからの行動も甘え。

玄関の扉が開く音がして、ただいま、という声が聞こえた。

「おかえり」

大きめの声で返してから、タオルを外して、のろのろと起き上がる。

居間に入ってきた母は、疲れ切った様子でバッグを置き、先程まで綾の座っていたソファに体を沈めた。

「夜ごはんは何ですか？」

母は、人にもものを頼んだりする時には、必ず敬語になる。

「カレーです」

台所に行ってコンロに火をつけ、コップいっぱい水を注いで居間に戻り、母に渡す。

母はそれを一気に飲み干した。それにアルコールを一息に飲み下す父の姿がだぶり、目が逸らせなくなつた。母と父の性格は正反対

だが、所作は、忌々しいほど似ている。

「ありがと」

コップを置き、母は部屋を出て行った。それからやっと体の自由が利くようになり、母がパジャマに着替えて帰ってくるまでに、夕食の支度をした。

午後十時を過ぎる遅めの夕食を済ませたあとは、母と二人でぼつとテレビを眺めていた。母は、CMの間などに、ぼつぼつと仕事の苦労話を零した。仕事は在宅介護を行う家庭のヘルパーだ。それぞれの家を車で回り、家族では対応しきれない部分を母たちヘルパーで補う形になる。ニユースで、介護を苦にして殺人を犯した、などという話題があると、母はその度に重々しい溜息をつく。

各家庭の軋轢あつれきに巻き込まれたり、仕事上の人間関係で躓いたりしながらも、高齢化社会の前線で戦っている母が、好きだ。幸せになつてほしい、と思つている。それは、本心。けれど、母の所作には、父の影がちらつく。その影に、母の姿が、からめ取られてしまう。さっきのように。

特に目を惹く番組もやつていなかったたので、母に、おやすみ、と声をかけ、自分の部屋の布団に潜った。

明日が来ることへの不安に押し潰されそうで、眠れない。それでも、無理矢理、目を閉じる。今まで、自分で保管してきた睡眠導入剤と安定剤は、母が管理することになった。まして今日は、母を心配させたくない、と、学校へ通い出したばかりだ。自殺をやり直すような気概は、どこにも残つていなかったが、使いたい、言い出す勇氣はなかった。

直と誰かの言い合う声が聞こえてきた。

全く眠つていないのに眠くない、という気持ちの悪い徒労感を引きずりながら、俯き加減に廊下を歩いていた時だった。言葉はうまく聞き取れないけれど、内容は察しがついた。教室へ入るには勇氣が要ったが、口論がおさまった後、素知らぬ顔で入ることができる

ほど、神経が太くもなかった。

「しつこい。裏切るも何も、最初から友達なんかじゃない、あんな奴と」

「残念。青野は、引き込めなかったね」

「人を遊び半分で追い詰めるのって、楽しい？」

「ねえ、阪井。あんまり、はしゃがないほうがいいよ。後で後悔するから」

「何その言い方。脅してるつもり？ 私は、矢崎みたいにはならない」

綾が前の扉から教室に入っても、真ん中の列の最後尾、柚樹の座席の近くで行われている言葉の応酬は止むことがなかった。

「直」

精いっぱいの勇気を込めて、その名前を呼ぶ。

クラスメイトの蔵本と安井と倉田、それに柚樹、直が、こちらを向いた。

そこで初めて気づく。直は、一対四の構図で口論を行っていた。

「ほら、ぐちゃぐちゃ言ってる間に、愛しの綾ちゃんが来たよ。慰めてもらえば？ 一線超えてるっぽいしね。阪井と飯原って」

「え？ 違うの？ ずっとそうだと思ってたけど。阪井さんが飯原さん以外に笑顔を向けるの、見たことない」

「消えてくんねーかな。吐きそう」

蔵本と柚樹は、直への追い討ちには参加していなかった。蔵本は笑顔を浮かべているだけ。柚樹は黙って、窓の外を眺めている。

柚樹に気を取られている間に、直が、蔵本たちに背を向け、こちらに歩いてきた。

「おはよう」

別に気にしていない、とでもいうような、作り笑いを、直は見せた。

直とは、小学校の五年生の時、直が転校してきてからの仲だ。そのせいで、笑みが明らかに取り繕ったものであるとすぐに分かって

しまった。

綾は直の手首を取り、教室の外に連れ出した。この行動に、また後ろから揶揄が聞こえた。

廊下は、登校してくる生徒たちであふれかえっていた。邪魔にならないように隅に移動した。

「ごめん」

「何で綾が謝るの？ 私が勝手に喧嘩してただけだよ」

教室の中での強気な表情はすっかり消え失せ、直は、小さな声で言った。直はそんなに、弁が立つ方じゃない。きっと、慣れない口論をした疲れが、その表情を見せているんだろう。

「でも、僕への陰口が原因じゃ」

直は自分の浮かべている表情に気付いたのか、すぐに顔を引き締めた。

「そのくらいでわざわざ……あの蔵本に、突っかかりしなないよ」
あの蔵本に。

そう。気に入らないというだけで、一人のクラスメイトを、退学にまで追い込んだ、あの蔵本に……。

「本当に、やめてね。僕が標的にされるくらいならいいけど、直まです巻き込みたくないから」

「自分が標的にされるならいいとか、そんな風に言わないで。哀しくなる。綾が悪いわけじゃないのに」

「悪いよ。いろんな人が、疑われたんだから」

「疑ったのはバカな教師たちでしょ。それに、矢崎の前例があったから、教師たちだって動いた。結局は蔵本のせいだよ」

そこで、ホームルームの始まりを告げるチャイムが鳴った。

「直。とにかく、蔵本たちには口を出さないで。無視してれば、そのうち飽きるよ、蔵本たちも。あいつらは本当に……危ないし、巧い。関わらないほうがいい」

04 距離感

「バスケ部の友達から聞いたんだけどさあ、飯原さん、五組の澤山さんをはめるために自殺未遂したらしいよ。その人のこと、本当に嫌ってて」

「嘘、そんなことで？」

「だって、普通……自殺未遂して十日しか経ってないのに学校、来る？ 絶対、おかしいよ」

「んん、じゃあ、そんなに早く来たのは、澤山さんがどうなったのか、確かめたかったから？」

教室に入った途端、そんな言葉が耳に入ってきた。

今ここにいない綾の話で、教室の大半の喋り声が占められていた。席に着くまでにも、悪意のないぶんだけ性質の悪い、興味本位の噂話が聞こえてくる。

直は、耳を塞ぐと、ミュージックプレイヤーを手を取った。

耳にイヤホンをつっ込み、ランダム再生のボタンを押す。たまたまかかった曲が、切ない女声を響かせ始める。それは、綾が自殺を試みる前日、柚樹から借りたアルバムの収録曲だった。

すぐに、止める。また、喧騒が耳に入ってきた。

「イベントあるたび調子乗ってたし、ちようどいいんじゃない？」

「優等生は、かばってもらえていいなあ。媚売つといった甲斐があったんだね」

「ウチだったら、絶対、あんなアンケート取ってもらえないよね。」

「つか、いじめ調査とか張り切ってたけどさあ。本当にいじめがあった矢崎の時なんて、何もしないで、指くわえて見てただけじゃん」
「でも楽しみ。矢崎さんより折り応えありそう。どこまで持つかな」
「はあ？ 薬物中毒で精神病でしょ？ ちよつと突けば終わるって」
「あはは、そう言われれば、そうだね」

下品な笑い声。

だが、主観が混じっているからそう感じるだけだ。実際には、艶のある綺麗な高音が、教室の後方から響いてきているのだろう。

「こっからどう攻める？」

そこで直は、堪え切れずに、後ろの、時間割が書かれた黒板のほうに目を向けた。

蔵本が一番後ろの席に座っていて、好き勝手に話す安井と倉田に囲まれていた。蔵本だけが、直を見つめていた。やや細い狐目で、それが白くて小さな顔に映え、病的なほど似合っている。その蔵本は、微笑を湛^{たた}えていた。

頭に血が上った。席を立ち、蔵本たちに近寄った。

「綾に、何するつもり？」

「あんたに関係ないでしょ、阪井」

「阪井さんだって、怒ってたじゃない。勝手に、自殺未遂なんかされて」

倉田は丁寧な口調で、ゆっくりと話す。直が不満を零したのは、聡美に対してだけだ。どこで聞き耳を立てていたのだろう。

「そのとき怒ってたからって、見て見ぬふりする理由になるの？」

「熱いねえ」

安井が、茶化すように笑う。

「取り巻きは黙ってて」

吐き捨てた。

「突っかかってきたのはお前なんだけど」

「お願いだから、やめて。不安定なんだよ、今の綾は。普通に考えれば分かることでしょ？」

「でも阪井さん、矢崎さんのとき、何もしてあげなかったじゃない？ 調子良いんだね」

「追い込んだ側に言われる筋合いなんてない！」

もう、ある程度の生徒は教室に揃っていた。会話に一瞬の穴があり、興味の対象が、蔵本と直のほうへ移ったのが感じ取れた。いい加減、ここにいない人間の事で盛り上がられるのは鬱陶しかったか

ら、ちょうどいい。

蔵本は何も言わず、笑いながら、頬杖を突いた。蔵本はいつもそうだ。たとえそれが残酷な提案でも、微笑を浮かべながら、楽しみに聞いている。

あまりに腹が立って、蔵本から目を逸らした。近くに居た柚樹が目に入った。

「よくこんな馬鹿げた会話、平気で聞いてられるね、柚樹」

ファッション雑誌を読んでいた柚樹に、声をかける。わざと、柚樹の後ろに立つ蔵本たちにも聞こえるように。

柚樹はちらりとこちらに視線を遣ったが、また雑誌に目を落とした。

「どうでもいい」

「どうでもいいって……。本当に、そう思ってるの？」

「もうすぐホームルーム始まるけど。席、戻れば」

「こういう時に裏切るなんて、最低だね」

「しつこい。裏切るも何も、最初から友達なんかじゃない、あんな奴と」

柚樹は雑誌のページをめくった。

「残念。青野は、引き込めなかったね」

風鈴が鳴るような、涼やかで透き通った蔵本の声を、今日初めて聞いた。

「人を遊び半分で追い詰めるのって、楽しい？」

「ねえ、阪井。あんまり、はしゃがないほうがいいよ。後で後悔するから」

「何その言い方。脅してるつもり？ 私は、矢崎みたいにはならない」

微笑しながらの蔵本の話し方や、立ち振る舞い、その他すべてが癪に障り、歯止めが利かなくなってきた。

更に何かを言おうと口を開けかけると、後ろから声が掛けられた。
「直」

そう呼ばただけで、頭が芯から冷えて行くのが分かる。振り返って、綾と目を合わせた。

「ほら、ぐちゃぐちゃ言ってる間に、愛しの綾ちゃんが来たよ。慰めてもらえば？　一線超えてるっぽいしね。阪井と飯原」

「え？　違うの？　ずつとそうだと思ってたけど。阪井さんが飯原さん以外に笑顔を向けるの、見たことない」

「消えてくんねーかな。吐きそう」

まだ言葉を重ねる倉田と安井を無視して、綾に笑いかける。

「おはよう」

不意に、手首が引かれた。掴む手には有無を言わさぬほどの力が入っていて、直はされるがままにした。

綾にしか笑顔を向けない。

そのことが原因でいじめられたのは、中学一年の頃だったか。自分で意識したことはない。でも、綾が、人のしがらみを解きほぐすような気持ちにさせる人間だと言うのは、知っている。昔から人付き合いが苦手で、何かと世話を焼いてくる綾に、依存していた面もあった。友人は綾だけだった。その依存が周りには気持ち悪く見え、標的にされたのだと思う。

中学時代の綾は、みんなから好かれていた。そのため全てが密やかに行われて、綾はたぶん、直がいじめられていた事実を知らない。いじめに遭ってから、綾との距離感には気を遣っている。今は、聡美にだって笑顔を向けるし……柚樹にだって笑顔を向けてきた。綾にしか笑いかけないというのは倉田の拡大解釈だ。けれど、周りから見て気持ち悪くない距離、というものを保っているかは、今も自信がない。保てていたら、自殺未遂の現場には遭遇しなかったかもしれない。

廊下に連れ出されたあと、綾が謝ってくるまでしばらく何も言えなかったのは、そのことを考えていたからだった。

いつものように、電気は点いていなかった。部活で酷使した体を

引きずりながら、居間の電気を点けた。

先程まで真つ暗闇だった居間の片隅で、母が、膝を抱えてうずくまっていた。

もう、この程度で、薄気味悪いと思うような気持ちはどこかへ消えた。祖父が、病気で寝たきり。祖母が、認知症。どちらも母にとつては義理の両親だが、その二人の介護に精魂尽き果て、抜け殻のようになつていた一時期よりは、ずいぶんと回復した。

部屋着に着替えて冷凍食品のパスタを解凍し、勝手に食べ始めた。
「直、おかえり」

席についてようやく、母は直に声をかけてきた。

「ただいま。母さんも食べる？ 冷凍食品だけど」

「今日はちよつと、食欲がなくて」

「そっか」

直は冷凍食品のトレイに入ったパスタを、カルボナーラのソースに絡めて口へ運んだ。

「おむつ、替えた？ 洗浄は？」

「ま、まだ……」

もともと青白い肌をしている母の顔色が、俯いたことで陰影がつき、余計に色みが薄く見えた。

「そんな顔しないで。責めてるわけじゃない」

「ごめんなさい、お昼食べた後、替えようと思ったんだけど……。
今日は、駄目で」

「今日は、駄目な日だったんだね」

自分の考えは言わず、母の言い分を繰り返す。

「疲れてる日は、無理することないから」

母がこんな状態になるまで、父は仕事ばかりやっていて、直は部活ばかりやっていた。専業主婦である母の仕事はこの介護だ、と疑いもなく信じていた。身動きの取れない義理の父親から、毎日毎日、憂さ晴らしの対象として辛く当たられる介護が、どんなに苦しいものなのか、見て見ぬふりをしていた。それでもまだ、部活はやめら

れない。部活をやめてしまったら、この現実だけに、直面することになる。そう考えると、足が竦む。

食事を済ませ、トレーを台所のゴミ箱に放り込む。台所では、お湯を沸かして、容器に入れた。容器はかつて洗剤が入っていた物で、よく洗ってから使い始めた。少しずつお湯が飛び出すのでとても扱いやすい。手を洗ってから、電子レンジを使って蒸しタオルを用意し、それらを持って、祖父と祖母がいる部屋に向かう。

フローリングで十二畳ほどある部屋。もともとは、居間として使っていた場所だ。祖母だけが介護対象者だったころは、別の部屋を介護用にあてていたが、介護のしやすさを重視して、二人一緒の部屋に移ってもらった……いや、こちらの都合で、一緒の部屋に、押し込んだ。

部屋には排泄物の匂いが立ちこめていた。

「ただいま。おじいさん」

「何時間も何時間も、よく放っておけるな。殺す気だったのか」

「すいませんでした。下着、替えますね」

ここで下着ではなく、おむつ、と言ってしまうと、祖父は酷く機嫌を悪くする。介護用品を入れている棚から、使い捨ての手袋を取って、手にはめた。

「いつもいつも、祖父より部活が大事、か。あの豚に、性格まで似たんだな」

恰幅が良く、よく笑う人だった母をやせ細らせた今も、祖父は彼女をそう呼ぶ。

いつものことだ。感情を排して、祖父の着衣を脱がせ、ゆっくりと、祖父の体を横向きに倒す。

「そうですね。娘なので」

紙おむつを広げると、中のパッドに便がこびりついていていた。だが、紙おむつ自体はさほど汚れていない。パッドを替えるだけで済みそう。トイレットペーパーで、肛門付近についた便を拭き取り、パッドにこびりついた便も拭き取る。異臭を発するそれを、すぐ近く

にあるトイレで流し、戻る。

布団を汚さないよう、フラットシートを、祖父の尻のすぐ下に差し込んだ。台所から持ってきていた、洗剤の空き容器に入ったぬるま湯を、陰部の周辺にかけた。病気を予防するため、石けんを使って泡立て、ペニスまでをよく洗う。またお湯をかけて流した。そして最後に、蒸しタオルで丁寧に拭いた。

何時間か、便のついたまま放置され、不快感が続いていたのだろう。このときだけは、さすがの祖父も、安らいだような表情を浮かべる。いつもの罵詈雑言も、少しの間、鳴りを潜めてくれる。母を追いこんだ祖父のことは、何をどう間違っても好きにはなれないけれど、気持ちは、分かった。

フラットシートを抜き、パッドを替えて、紙おむつをつけ直した。次は、祖母の番だ。

05 ミルクティー

五時間目の体育の授業を終えて、綾と聡美と一緒に教室へ戻ると、先に戻っていた蔵本と柚樹が、二人で何かを話していた。

直は小さく舌打ちし、自分の席について着替えた。

綾が学校に戻ってから一週間と少しが過ぎ、このところますます、雰囲気が悪い。今日は、直よりはるかに社交性のあるはずの綾が、直と聡美以外のクラスメートと話している姿を見掛けなかった。蔵本のやり方は、綾の存在を無視させる、あるいは綾の持ち物を壊したり、隠したりする、そういう類のものではなかった。蔵本は、このクラスの人間がもつ交友関係を把握して、別のクラスを起点に、話を流すだけだ。綾は、自殺未遂する前に、突然錯乱してカッターナイフを振り回したことがある。綾は、同じバスケ部の澤山にいじめの疑いをかけさせ、澤山を貶めるために、自殺を図った。綾が抱える精神的な疲れや、人間関係の問題点を使った、もっともらしい、虚偽の流言を。

そしてそれらを聞いた人たちは、綾から距離を置きたがるだろう。それが、今の綾が一番怖がっていると思われる、恥ずかしいという感情に訴えかけている。相手も、あからさまな態度はとらず、申し訳なさそうに、やんわりと会話を断るから、綾は申し訳なさとしんがしきで、それ以上、どうしようもなくなってしまう。いっそ無視でもされていれば、自分以外に原因を求めることもできるだろう。けれど、周りからの「ごめんなさい、話しかけられても」という態度は、綾自身の自殺未遂に、原因を求めさせることになる。

直は、学校に戻った綾が、四六時中、周囲からの視線を気にして緊張しているのが分かった。恥ずかしくなると無口になって俯く、そんな綾の癖を知ってもいる。しかし蔵本は、綾と親しいわけでもないのに、今の綾に対して、効果的な方法を見抜いた。

蔵本は、表面的には、綾を眺めているだけだ。それでも、綾は確

実に、追い詰められている。

「あーもー、疲れた！」

着替え終えて椅子に座った所で、両肩に手が乗せられ、体重をかけられた。

「重い」

小さく零すと、聡美はますます体重をかけてきた。

「いいよね、体力バカは気楽で。美術室で休んでこよっかな」

「美術室で休む病人がどこにいるの？ それに英語、期末で三十点以下取ったら留年でしょ」

「あれ、次、英語か」

「時間割くらい、確認しなよ。後ろの黒板に書いてあるんだからさあ」

「いいんだよ。教科書、ほとんどロッカーに揃ってるし、直前に見れば」

聡美が、小さく笑った。そして、直の肩を軽く揉んだ。

「直のほうは、少し肩の力、抜きなよ。氣い張ったってしょうがないでしょ」

「分かってる」

表面的には何もやってこない以上、いまは綾が少しでも気楽に生活できるようにするだけだ。

聡美は体重をかけるのをやめ、短く切り揃えられた髪を翻し、教室後ろのロッカーへ教科書を取りに行った。その間にもわざとらしい咳をして、「あー風邪が」と零していた。

軽くため息をついて、机の脇にかけた鞆のファスナーを開けた。今日を見るのを忘れてしまっていたけれど、母からメールが来ているかもしれない。

しかしいくら手だけで探しても、見つからなかった。仕方なく、鞆を膝の上に載せて、探った。やはりない。家に忘れてきたらしい。母には、気分が優れないときは、無理せずメールで愚痴をこぼしてほしい、と言ってある。メールが送られてきたら、授業や部活の

合間合間にどうにかなだめすかし、不安を和らげておくのが、日課だった。またいつ前の状態に戻るか分からないのが、今の母だ。

昨日、少し休んだみたいから、今日は大丈夫だろうけど……。明日からはよく確認しないと。

授業の始まりを告げるチャイムが鳴ったが、英語教諭はまだ来なかった。何気なく、ドアに備えられた縦長の窓から、廊下を見やる。廊下側の一番後ろの席なので、廊下と、前の席の男子しか視界に入らない。彼は、教室内にほとんど男子がいない空き時間を持て余し気味のように、机にうつ伏せになっていた。この付近の高校は、学力レベルのバランスが悪く、難関高校から少しランクを下げた位置にあたる高校が、この高校以外には、あまりなかった。三年前から共学になり、それを狙った男子が細々と入ってくるが、九対一の比率では少し、辛そうだ。

男子といえば、と思い出す。男子バスケット部の、芝原。綾のほうは特に意識していないみたいだけれど、柚樹の話では、芝原は綾のことばかり見ている、ということだった。彼は今回の騒動で、何か綾に、してやってくれているのだろうか。いくら綾が心配でも、バスケット部のいざこざまではカバーできない。

廊下から風が吹きつけて、ドアが大きな音を立てた。ちょうど、英語教諭が、前のドアから入ってきた。

六時間目の授業が終わり、部活用の鞆を肩に担ぐと、目の前に聡美が立ち塞がった。綾に何か声をかけてからにしようとしたが、彼女は少し目を離れた隙にいなくなっていた。

「なーおっ」

聡美の背丈は、直の胸に届くか届かないかくらいの高さ。邪氣のない黒目がちな瞳がこちらを見上げていた。

「なに」

「今日、暇だったら美術室においでよ。他の部員が持ち込んだ漫画とか、暇潰しのものならいっぱいあるし」

「え？ 今から部活なんだけど」

「暇だったらね」

直の肩を軽く叩いて、聡美は廊下に飛び出していった。

廊下に聡美の姿はなかった。直を置いてさっさと美術室に行ったらしい。聡美の意図が分からず、かといって、携帯電話を忘れたので聞き直すこともできず、足は勝手にいつもの習慣で進んでいく。

「あれ、阪井さん？ 部活、出るの？」

通路に設置された、自動販売機の前を通り過ぎようとしたとき、陸上部の顧問の、女教諭の声が聞こえた。

顧問なのに不思議な事を訊く、と思いつつ、立ち止まる。

「んつと……」

どう答えればいいのだろう。

「ああ、言葉足らずだったわね。ごめんなさい。最近、無理してるみたいだから……。一日くらい空けた方が良いかな、と思つて。阪井さんの練習量なら、一日休んだくらいじゃ、差をつけられたりしないし。あ、ぜ、全国クラスの子には差をつけられるかもしれないけど」

顧問は、不安げに上目遣いをしてきたり、自動販売機を見たりしている。視線がふわふわと彷徨つて、ひとところに落ち着かない。

……心配、されてる？

「私、そんなに、おかしいですか」

「うーんとね……。うん。最近、ちょっと、ね。パツと見で分かるくらいには」

ふと、自分が綾に向けている心配と、自分が顧問に向けられている心配が重なった。

顧問に、この疲れを背負わせてまで練習したいほど、陸上に命を賭けているわけではなかった。

「今日は出ません。介護の手伝いがあるので、休みを貰おうと、言いに行く途中だったんです」

「そ、そう？ よかった。阪井さん、このところ、やつれてるみた

いで心配で。介護のお手伝いが終わったら、しっかり食べて、ゆつくり休んでください。あつ、あと、何かあったらすぐに相談してね」
微笑みを一つ残し、顧問は人の流れの中に加わった。

咄嗟に答えてしまったが、部活を介護以外の理由で休むのは、ずいぶん久しぶりだ。どこか抜けている性格の顧問に悟られるほど、顔に、疲れが出ていたのだろうか。

鞆を肩にかけたまましばらく自動販売機を見つめ、少し迷ってから、財布を取り出した。気温の下がり始めた今も、未だにスポーツドリンクがたくさん並べてある。その中から、温かいミルクティーを選んで、買った。

人気のない方へと、校舎を渡り歩く。そして、授業以外ではほとんど寄りついたことがない、美術室のドアをノックした。横開きで、ところどころペンキが剥げた白色のドア。開けたのは、聡美だった。聡美は一瞬、驚いたように固まったが、すぐに笑顔になった。

「入って入ってー」

美術室は、一般生徒用と思しきスペースと、美術部の生徒用と思しきスペースが、衝立で分けられていた。パーティション代わりの衝立は横長で、三つあり、壁と合わせて一つの部屋を作り出している。聡美は、折り畳み式の衝立を、少しずつらした。後に続いて入ると、そこはまるで学校に、ワンルールの部屋をそっくりそのまま持ってきたかのようなだった。急造ワンルールの真ん中には、会議室に置いてあるような長い机と、パイプ椅子が四脚あった。そして漫画のびつしり詰まった本棚があり、教科書や雑誌を収めた三段チェストがあり、学校指定のジャージが床に落ちていて、机の隅にはお菓子がいくつか置いてある。

「適当に座っていいよ」

聡美は、本棚を背にして、奥の椅子へ座った。直は鞆を床へ放り、聡美の左隣に、座った。

「他の部員は？」

「今はいない。いつもは、ここで一時間くらいだらけて、美術室を

出て行く感じかな。他の三人は、漫画やイラストを描いたりしてるの。三人のやり方だと、仕上げにはパソコンが必要だから、ここじやできないんだよね。美術室の道具を使って描いてるのは私だけ」

「え、紙に描いたのをどうやってパソコンで仕上げるの？」

「スキャナーっていう機械を使って、画像化して取り込んで、それに着色、修正を加えるとか。でも最近は、最初から全部パソコンでやっちゃう人も多いかな」

「最初から全部……」

パソコンだけで絵を描く行為が完結するイメージは、全く、湧かなかった。

すぐに聡美は説明を付け加えてくれた。

「マウスじゃ難しいから、だいたいの方はペンタブっていうのを使うんだよ。ペンの形をしてて、ペン先を専用の台座に押し付けると反応するんだ。で、パソコンがその動きを読み取って、ディスプレイ上に絵が描き出される。そういう仕組み。私はあんまり使ったことないけどね」

「へえ。すごいね、なんだか。楽しそう」

漫画やイラスト、それとパソコンに関してはほとんど何も知らないので、素直にそう思った。

「うん。きつと面白いよ、イラストも」

聡美は嬉しそうに笑った。

そこで、自動販売機で買ってきたミルクティーの存在を思い出した。鞆から二本、取り出し、机に置く。

「ありがとう。お金……」

「いいよ。勝手に買ったただけだから。奢り」

「ありがと。じゃ、遠慮なく」

聡美がプルタブを引いて、すぐに一口目を飲んだ。

「おいしい。温まるー」

直はミルクティーの缶を手の中で転がしながら、パイプ椅子にもたれかかった。椅子の軋む音が、やけに大きく聞こえた。校舎の外

れにあるからか、遠くで鳴る野球部の練習の音が届くだけで、それ以外にはほとんど何の音も聞こえてこない。

「静かでいいなあ、ここ」

「七時過ぎとかまで一人でいると、ちょっと怖いよ」

「いつも外から見てるから分かんないけど。夜の学校ってどんな感じ？」

「最低限の電気しかついてないから、暗いの。職員室に鍵を返しに行くとき、真っ暗な廊下で、自分の上履きの音だけがやけに大きく聞こえて……」

「それは怖いね」

言ったあと、俯いて軽く目を閉じた。手に持ったミルクティーの缶を机に置き、じっと、静寂に身を委ねる。

聡美も、ミルクティーの缶を机に置いたようだった。それから、立ち上がる気配がした。

「じゃあ、ここでゆっくりしてて。そこに、先輩が置いていった漫画がいっぱいあるから」

「どこか行くの？」

目を閉じたまま、訊ねた。

「行かない。キャンバス立てるにはここじゃ狭いから、いつも一般生徒用の方で描いてる」

「そっか。絵、頑張ってるね」

自分と全く接点のない部員が来たら、対応に困りそうだったので、安堵した。

聡美が絵を描く準備をしている音を聞きながら、目を閉じたままじっとしていた。

そうしているうち、だんだんと眠気が襲ってきた。パイプ椅子を引き、机にうつ伏せになった。

聡美のイメージは、甘くて温かなミルクティーだ。凍えた体を優しく包んで、ほっと一息つかせてくれる。聡美と一緒に部屋にいるというだけで、こんなにも安心する。

06 だから一緒に

練習の終わりに、ジャージと、学校の備品であるビブスの代金、一万円を支払って、顧問に頭を下げた。

一昨日の日曜日、綾の所属するバスケ部は、電車とバスを乗り継いで遠征に行った。市外の高校より、練習試合に招かれたからだ。新人戦も終わり、開催が近いウィンターカップは予選で敗退。春まで公式戦がない高校同士の、練習試合だった。対戦相手校に着き、借りた更衣室へ荷物を置いた所で、顧問に呼ばれた。

その隙に、当日、試合で使う予定だったジャージとビブスが、何か鋭利なもので裁断されたように、ばらばらになっていた。バッシュはどこかへなくなっていた。

こんな、工夫も何もない、直接的でくだらない真似をするのは、澤山だ。

あの時は、そう思って片付け始めたが、誰も、片付けを手伝う素振りは見せなかった。誰がやったかなんて、本当のところは、分からない。

結局、電車に鞆を置き忘れたことにして、制服のまま、試合を見学した。綾がいつもこなしているポイントガードのポジションには、代わりに柚樹が入った。柚樹は、個人技能は平凡だが、敵味方の動きを先読みする洞察力とパスセンスがある。綾が司令塔の位置にいる時よりも、チームはまとまっているように見えた。見えただけでなく実際に、実力ではこちらより数段上であるはずの対戦相手から、僅差で勝利をもぎ取った。笑顔で健闘を称え合う部員を、テレビの中の出来事のように眺めた。

「お手数おかけしてすみません。これからは気をつけます」

「ああ……。まあ、気にするな。金もちゃんと払ってもらったしな」顧問にもう一度頭を下げた。制服の入った部活用の大きな鞆を持って、部室に向かう。今日から、芝原の厚意で、荷物は男子側のコ

ートに置かせて貰っていた。

父から離れたいま、生活に、それほど余裕があるわけではなかった。少し荷物から目を離したというだけで、母親に余計な経済的負担を強いたことが、悔しくもあった。しかしそれよりも何よりも、恥ずかしかった。顧問にはとても、言い出せなかった。

ビブスとジャージの切れ端を、何人もの部員に見下ろされながら、ひとつひとつ、独りで、拾い集める。

あの作業で味わった恥の感覚が逆流してくるのを抑え込み、部室の扉を開けた。

部室には、着替え途中の柚樹だけがいた。綾は柚樹の方をそれきり見ず、荷物を放って、学校指定の体操服に手をかけた。

そして、体操服を脱ぎ始めると、

「似合ってたね、体育館シューズ」

柚樹が、馬鹿にし切った声で囁き、出て行った。

バスシュが無くなったままだったので、今日は、体育館シューズで練習した。そのことを、言っているのだ。

綾はひとつ深呼吸をしてから、体操着を壁に向かって投げつけ、壁際に寄せられているベンチを、蹴り飛ばした。水色の破片が散り、プラスチック素材で作られたベンチは、蹴った部分だけ欠けた。

「誰がやったの？」

誰もいない更衣室で、綾はひとり、呟いた。

一年生の時、入学祝い、と言って母親がくれたお金。何に使おうか迷いに迷って、バスシュに決めた。

学校の前の、銀杏が両脇に植えられた坂では、新芽が芽吹いていた。入学したばかりで、道もよく分かっていなかった日の、放課後名簿順で前後の席になった女子が、バスケットに入る予定だと知り、彼女と一緒に、駅前のスポーツショップへと立ち寄った。

お互い、少しぎこちない笑顔を浮かべたりしながら、中学時代のバスケット部の話をしたり、バスシュのデザインについて、ああでもない、こうでもない、と言い合ったりした。バスシュのレディースコ

ーナーの前で、すっかり陽が落ちてしまっただけだった。

そして、バスシユを買って店を出る頃には、割と打ち解けることができたその女子に、下の名前を聞いた。

彼女は、落ち着いた、静かな声音で『柚樹。青野柚樹』と名乗った。

「返してよ……」

ベンチを蹴った足が、今さらになって痛みを発し始めた。それ以上、物に当たることはできなかった。当たる力が、湧いてこなかった。しばらくその場に立ち竦み、俯いたままだった。

部室から駐輪場へ向かうには、体育館の横を通り過ぎなければいけない。

ドリブルの音、バスシユが床を蹴る音、ボールがネットに吸い込まれる音。芝原は、冬も近づいているのに、シャツの背中部分を汗でぐっしり濡らしながら、一人で居残り練習を続けている。練習しない日は、いつも、声を掛けてから帰るが、今日は、掛けようと思えなかった。

「今日も練習やらないで帰んの？」

しかし入口を通り過ぎようとした所で、体育館の中から声がした。
「うん。ちよつと疲れてるから」

無視するのも、面倒だ。後からいろいろと詰問されたくはない。

綾は、声に変にかすれたりしないよう、注意して、返事をした。

「ちよつと疲れてる、程度じゃないだろ、どう見ても。さっき、青野が通ってったけど、青野に何かされたとか？」

「されてない」

今度は、自信がなかった。けれど、距離の離れている芝原に聞こえるよう、大きな声を出したおかげで、震えは伝わらなかったらしい。

「そっか。そうだな。青野は、青野だけは、違っは……」

聞かせるともなしに、芝原が言った。綾に対して言ったのか、それとも独り言か。判断しかねた綾は、応えなかった。

月は雲に隠れてしまっている。街灯を頼りに向かった駐輪場は、部活終わりの生徒で混雑していた。まだ、バスケット部の部員も固まって、立ち話に興じていた。人がはけるまで待つことにして、体育館の方に引き返した。

体育館の外周に作られた、コンクリートでできた通路に座り、校舎を眺めていると、二人の人影が近づいてきた。部員と最後に話したのは一週間前だし、わざわざやってくる人間に心当たりはなかった。自分に用があるわけではないだろうと思い、視線を足元に落とした。

「いた！」

「あー、もう。耳元でいきなり怒鳴らないで」

「あやー」

すぐに顔を上げる。暗闇の中で手が動いていた。

「なんでそんなところにいるの？ 探しちゃったよ」

「人がいっぱいいるから、少し時間空けようかと思って。そっちはなんで？」

「直が珍しく部活さぼったから、一緒に美術室でだらだらしてた。

普段は時間合わないし、たまには、どっか寄ってから帰ろうよ」

「うん、いいよ。一緒に帰ろう」

聡美の弾んだ口ぶりにつられて、今の今まで渦巻いていた痛みが、静かに霧散していくような気がした。どこかで遊んでいくような元気はないはずなのに、自然と、同意していた。

「あ、ねえ、ゆずは？ ゆずも……」

「なんで今、柚樹の事なんか出すの？」

直が初めて、口を挟んだ。

「あ、ごめん、無意識に」

「さっき体育館で、綾の居場所、聞いたんだけど。芝原ってあいつ？」

「そつだよ。それがどうかした？」

「なんでもない。行こっか」

「うん」

綾は立ち上がり、通路から地面に飛び降りた。

先に歩き始めた直が、ふと振り返って、言う。

「聡美、ごめん。さっきの言い方、きつかった？」

「直がきついのはいつもだよ」

聡美はそう言って笑った。

……このやりとり見るの、なんだか、久しぶり。

綾は小さく、安堵の吐息を零した。

最寄の駅ビルに行くことになった。

駅の構内からそのビルへ入ると、二階部分に出る。手ごろな価格帯のブランドが並んでいるフロアだ。カジュアルなものから、デパートに着て行くような気合の入ったものまで、多種多様の女性服が取り揃えられている。直や聡美なら、特に選り好みせず買えるかもしれないが、綾の小遣いでは簡単に買えない。こういうところに来るときは、好きなブランドのセール品、そしてカジュアルなものの中から、頑張つて選ぶことになる。

まずは直が見たいと言った店の区画に入った。直は、スカートでもパンツでも、何を履いても似合う。足が長くて綺麗で、ウエスト周りは部活のおかげで無駄な脂肪が削ぎ落されているからだろう。可愛さを前面に出す服が似合わないことを、本人は残念がっているけれど、綾から見れば、どんなに取り澄ました服装をしても、まったく嫌味じゃない直が、羨ましい。

黙って服の物色を始めた直の隣で、聡美はさして興味もなさそうに、マネキンに着せられた服を引っ張ったり捻じったりして遊んでいる。聡美は、一時期ファストファッションと呼ばれた系統の服を好んで買い求める。流行はお構いなしで、いつも同じ服を着続けているから、こういった場所で服を買っているのを見たことがない。

「これ綾に似合いそう。アウター欲しいって言ってたよね」

直がぼつりと呟く。右手に売り物のパーカーを持ち、こちらに向

けた。パーカーは緑で、左胸にシンプルなロゴが縫い付けられている。裏地のもこもことしたボアが、襟元から覗く。デザインがシンプルで、朝練の時などにも、着回しが利きそうだった。

「で、下はこれにブーツとか」

これ、と言つて今度は左手をショートパンツのコーナーに伸ばし、デニム地のものを手に取った。

「無理無理無理！ 上は気に入ったけど、下の合わせは……。そんなに足に自信ないよ」

「夏に一回、履いてなかったっけ」

「あれは……気の迷いというか、試しに履いてみただけというか。とにかくそれは嫌！」

「えー、駄目かなあ。聡美はどう思う？」

「いいんじゃない？ 私、直の足より、綾の足のほうが、見てて襲いたくなるもん」

「変態っ」

「下はいいか」

直は軽く流して、デニム地のショートパンツを元あった場所に戻した。

「上、どうする？ 値引きでイチキュウだよ」

「どうしよ……。もこもこ、可愛いなあ」

鞆から財布を取り出し、小遣いの残金を確認する。しかしそこで思い出した。すぐに財布をしまう。

「あ、でも、今はやめとく。今月はもう使えないんだっただ」

ジャージの代金を母に返すまでは、使えない。バツシュのこともある。これ以上思い出すと悔しさが再び沸き立ってきそうだったので、すぐに考えるのをやめた。

「じゃあ、しょうがないね」

直はパーカーも戻した。

「服買わないなら、聡美に付き合っただけて。買いたいものがあるんだってさ。私、もうちょっと見てくから」

「せつかく一緒に来てるのに、一人で選ぶなんて、寂しくない？」

「小学生じゃないんだから」

苦笑いされてしまった。

聡美とともに五階の書店へ向かい、適当にぶらついた。気が向けば本は読むが、それは大抵、図書館で、だ。新品の本とはあまり縁がない。名前を知っている作家の新刊を手に取り、冒頭を軽く立ち読みしたあと、先が気になり始めたので読むのをやめた。このまま読み続けたら、閉店までここに縛り付けられてしまう。

聡美を探した。いつもの少女漫画のコーナーにいるのかと思ったら、彼女は絵本のコーナーにいた。

「乃亜ちゃんに？」

声をかけると、聡美は照れ笑いした。

「うん。最近、ちょっと難しい言葉でも分かるようになってきたから」

「可愛いよね、乃亜ちゃん」

「私は本当は、ノアなんて、当て字っぽい名前にしてほしくなかったんだけど。でも、まあ、産んでくれたお母さんには感謝かな」

人を呼ぶことを厭う事情もなく、四人が集まれるだけの広さもある聡美の家には、何度か行ったことがある。そのたびに、聡美の十五歳年下の妹、乃亜は、こちらの予想を超える成長ぶりを見せてくれる。この間行ったときなどは、顔も覚えてくれて、あや、あや、と言つて、おぼつかない足取りで綾に向かってきた。

聡美が見ていなければきっと、乃亜を殴り飛ばし、何度も何度も足蹴にしていただろう。殺したい、と思った。穏やかな聡美の家庭に対して、吐き気を覚えるほど強く、嫉妬を覚えた。それは、自殺を考え始める少し前だった。

人は誰でも悩みを抱えていると言っけれど、聡美には、本当に悩みがあるんだろうか……。

「これにしよう」と

ぱたん、と絵本を閉じる音。書棚下段の絵本を見るふりをしてい

た綾は、顔を上げた。

それから、さっきまでいた店の紙袋を手にした直と合流し、ペットショップにも寄った。聡美は年甲斐もなく、ペットが見えるガラス窓を指で叩いてまわり、店員に注意されていた。直はひとりで、一匹の犬をじつと眺めていた。

CDショップでは、三人とも知らないことが条件のマイナーなグループから、誰が名曲を発掘できるか、という遊びをした。それぞれ三枚のCDを集めてから、視聴用の機器に張り付いた。直が見つけてきたシンガーソングライターの歌が、今日一番の名曲に認定された。

くだらないけれど、楽しかった。些細なきっかけで今置かれている状況を思い出し、醒めた頭で俯瞰してしまう時もあったけれど、楽しかった。

電車通学の聡美とはそのまま駅で別れ、直と二人、自転車で帰宅の途についた。

帰宅方向が分かれるY字路で、なんとはなしに、自転車を停めたふと直を見ると、既に彼女も自転車を停めていた。

晩秋の街路は、耳鳴りがするほど、静かだ。

「聡美がいると、本当、楽になる」

しばらく黙っていた直は、唐突に、そんなことを言った。彼女はハンドルから両手を離し、アスファルトに両足をつけていた。

「うん。二人だけだったら、きつと、思いっきり沈んでたかも」

片足だけでバランスを取りながら、そう答える。

「この間、蔵本とやり合ったときとか……聡美だったら、軽く受け流せてたよね。でも私は、うまくかわせなかった。友達ぶって、逆に、迷惑かけて」

部活の時は後ろで括り、ふだんは胸の辺りまで垂らしている髪を、直は乱暴に撫で付けた。

「僕のためにやり合ってくれたんでしょ？」

「それは、そうだけど」

綾は軽く笑った。

「いま、自分で言ったこと、気付いてる？」

「何が……。あ」

「変な所で意地張るよね、直って。そこが好きだけど」

確かあの時の直は、綾のためにわざわざ、蔵本に突っかかりたりなんかしないと、はぐらかしていた。

そしてこちらは、蔵本たちは無視しておけばいい、なんて釘を刺したけれど、本当は少し、嬉しかった。巻き込みたくないのは本当でも、直が陰口を聞き流したら、やっぱり、悲しくなったはずだ。

直はしばらくこちらを見つめたあと、目を逸らした。

「あのさあ。綾のためだってバレたついでに、お願いしてもいい？」
軽めの口調を装ってはいるが、なんとなく、言いたいことは分かった。

「足搔いて。あれを、やろうとした理由は聞かないよ？ 聞かないけど……。でも、考えた？ 小学校からの友達、目の前で、死にかけてるのを見つけた時の、私の気持ち。医者が安全だって言うままで、病院の廊下に吐かないように必死で堪えて、震えも、止まらなかった。いまちよつと、家がごたごたしてて、うまく、綾の事、助けてあげられないかもしれないけど。でも私も、頑張るから。だから一緒に、綾も、足搔いて。一人で、また勝手に溺れたら……。怒るよ」

黙って、頷いた。

家の電気は消えたままだ。母はまだ、帰ってきていないらしい。

母の車庫入れの邪魔にならないよう、駐車スペースの隅のほうに自転車を停め、玄関の扉を開けた。

「ただいま」

二階の自室で部屋着に着替えてから、一階へ下りた。

この間の日曜に、異臭を放つゴミ袋などを、母と協力して片付け

たが、それでもまだ、かなり散らかっていた。二人して倦んでいた時期に溜め込んだゴミの量は半端ではない。ここところはまた、掃除する気力も萎えかけていたが、直と聡美のおかげで、少し、持ち直せた。

「ご飯をすぐ用意して、片付けも進めておこう、そうすれば母さんも喜ぶ……」。

そこで、鞆に入れっ放しの携帯電話が鳴った。メールだ。

誰だろう、と思うと、直だった。

言い忘れたことでもあったのかな、と訝りながらメールを開く。

「そういえば、聞き忘れてただけだ。澤山をはめるために狂言自殺したって、本当？」

一瞬、息をするのを忘れた。

アドレス帳で直のアドレスを一字一句誤りがないか確認して、また、受信ボックスを見た。間違いなく、直からのものだった。

「どうしたの、直？」

震えそうになる手を律しながら、メールを打ち返す。

「聞いているのはこっち。答えてよ」

「そんな理由じゃない」

「じゃあ、どんな理由？」

ついさっき、理由を訊いたりしないと言ってくれたばかりなのに。

「言わないとだめ？」

「本当のことだから、言えないんだ？　本当だとしたら、最低のクズだね。クズ以下だよ」

「違う。澤山は関係ない」

「綾のせいで、どれだけ迷惑がかかったと思ってるの？　警察に事情聴取まで受けさせておいて、狂言自殺。私のこと、何だと思ってる？」

「友達だよ」

「そう？　私は、思っていないよ。今回の事で、もう、うんざり。いつもいつも、へらへら笑って、私が陰で何されてるかなんて知りも

しないで……』

『何のこと？』

『聡美に頼まれて、今日まで付き合ってたけど。明日からはもう話しかけないで。錯乱してカッター振り回すような奴と話してるほど、暇じゃないから。周りに迷惑かける前に、さっさと入院したほうがいいよ』

「何で、そんなこと、言うの？」

ディスプレイに向けて、問い掛けた。

『一緒に足掻いてくれるんじゃ、なかったの？』

送ったメールは、サーバー上を彷徨って、綾の携帯電話に送り返されてきた。

情報の処理が追いつかない。

……なんで？ どうして？

07 暇つぶし

今日は少し寝坊してしまい、祖父母を看ている間に登校時間が迫っていた。朝食は携行栄養食だけで済ませ、鞆を手に取り、少し足を早めて玄関を出て、自転車に飛び乗った。

直は、朝で混雑した道路を、歩道と車道を行き来しながら急いだ。銀杏の葉が咲き誇る坂も立ち漕ぎで突破すると、どうにか始業の五分前に駐輪場に滑り込むことができた。

ここから教室までが遠い。自転車に鍵をかけてから、走った。体育館を通り過ぎたあたりだった。

「おい」

誰かの声がして、直は足を止めた。後ろを振り向くが、誰もいない。訝りながら前を向こうとしたとき、後頭部に何か硬いものが当たった。視界が激震し、間を置かずに痛みが走り、直はその場に倒れ込む羽目になった。

突然の痛み混乱して、咄嗟に取れた行動は、後頭部に手をやることだった。ぬめついた感触。手を見ると、赤黒い粘液が手を濡らしていた。

血？　そこでまた動きを止めてしまった直は、蹴りつけられ、アスファルトにうつ伏せにさせられた。そして何か紐のようなもので後ろ手に縛られた。

「立て」

口にマスクをしているらしく、籠もってしまつて声が聞き取りにくい。男がいつも通りにしゃべっているのか、女が低い声音を遣っているのか、わからない。直が抵抗する素振りを見せると、もう一度、後頭部をやられた。傷口をえぐるような殴り方に、涙が滲んだ。「次は加減しねえぞ」

平然と加害側に立てる連中の、言い方だ。中学時代に暴力と罵倒の入り乱れるいじめを受けた経験から、そう嗅ぎ分けた直は、黙っ

て従うことにした。

部室棟の一角、今年廃部になった剣道部の部室前に着くと、直は手首の紐をほどかれ、そこに蹴り入れられた。

せめて男か女だけでも確認しようとしたが、扉はすぐに閉じられていた。何か大きな音がして、それから足音が遠ざかっていった。ひとまず、性的な目的はないようだということには、安堵した。しかしそうなつてくると、直をここに押し込んだ奴のメリットがわからない。

何か仕掛けていったような音がしたが、念のため、扉に取りついてみる。やはり、いくら力を入れてもドアノブが回らなかった。何度扉に体当たりしてみても、無駄だった。

部室の中を見回す。見事なまでに、何もない。窓が一つあるだけで、綺麗に片づけられていた。

曇りガラスのはめられた窓は、斜め奥に開くタイプで、全開にしてみたが、とても通れそうになかった。

ただ、窓そのものは大きいから、ガラスを壊せば、通れそうだが、閉じてから、手加減なしで蹴りを入れた。だが、これも駄目。丈夫な素材でできているらしく、びくともしなかった。

後頭部は幸いにも、傷が浅そうで、そうこうしている間に、血は徐々に凝固を始めてくれた。

……することがない。

しばらくは、後頭部の痛みと、妙な状況に対する不安とで、目が冴えていた。

けれど昨晩は、祖母の発する奇矯な叫び声と屋内徘徊に付き合わされ、全く眠れていなかった。何もない部屋の隅へ座り、壁に寄り掛かっていると、自然に瞼は落ちていった。

叩き起こされたのは、窓ガラスが割れる音だった。目を開けると、右隣に、粉碎した窓ガラスが、散らばっていた。そこに、一枚の紙片が落ちていた。拾うと、「荷物は教室」とだけ記されていた。

すぐに立ち上がり、破片で傷をつけないよう、慎重に、窓を跨いだ。

そして窓の外に出ると、そこは野球部の練習グラウンドの裏手だった。走り回って辺りを探したが、どこにも人影はなかった。ふと校舎の時計を見遣る。四時五分。帰りのホームルームが近い。授業を一日休んで、眠っていたということになる。

ますます、閉じこめた人間の行動の意図が不明瞭に感じられた。だが、紙片には、荷物は教室にある、と書いてあるのだから、一応は、取りに行かなくてはならない。あれには部活で必要なものも入ったままだ。もし教室にないとしても、他に心当たりの場所がないから、ひとまず、戻るしかなかった。

教室ではまだ、授業をやっていた。廊下側のすりガラスは全て閉まっていたので、廊下の壁に寄りかかってしまえば他の生徒からは見えない。

しばらく待っていると、教師が教室の前の扉から出ていった。途端に、教室がうるさくなる。

直はそのうるささに乗じて、教室の後ろの扉から入った。何人が視線をよこしたが、他は自分たちの話に集中している。

入ってすぐの直の机には、鞆は置いてなかった。後ろの掃除用具入れの前に置かれていた。すぐに取って出ようとしたが、間の悪いことに、

「席につけー」

と言いながら、担任が入ってきた。いま出ていけば見咎められ、教室に連れ戻されるだろう。それなら最初から座っていた方がいい。椅子を引くと、前の席の男子が、振り返って、

「体調、戻った？」

と聞いてきた。どうやら、保健室で眠っていることになっていたらしい。

「うん。心配してくれて、ありがとう」

ひとまず、合わせておく。

特に変わり映えのしない連絡事項を、担任が儀礼的に伝えていく。そして、担任がホームルームを切り上げるときの決まり文句、

「何か質問はあるか」

を言ったとき、

「はい」

と鈴の鳴る音がした。蔵本だ。

「おお。珍しいな。何だ、突然」

「文化祭の時、連絡用に作った、クラスの掲示板に、飯原さんを誹謗するような内容の書き込みが、執拗に為されています」

途端、担任の顔が険しくなった。クラスの連中が、水を打ったような静けさに包まれた。

綾は、その発言と同時に、真ん中の列でびくりと肩を震わせた。来たか、と思った。けれど、蔵本の狙いが曖昧だった。綾がいじめられていることを明らかにすることで、辱めを与えるつもりだろうか。

「ホームルームが終わったあとに、話を聞こう」

「いえ、今じゃないと駄目です」

「どうしてだ」

「ひとまず、掲示板を見てください」

掲示板の存在は、担任も、知っている。担任は、若くもないが、携帯電話の扱いに困る、という世代でもない。

蔵本がそう言うのと、担任は、携帯電話をいじった。

そしてしばらく画面を見つめ、段々と眉間にしわを寄せていった。そして怒鳴った。

「なんだ、この内容は！」

「一番最近の投稿時間を見てください」

教室にいる人間たちも、携帯電話を手に取り、見始めた。直はただ、綾の背中を見つめる。昨日の帰り、家に忘れたと思っていた携帯電話は、まだ、見つからなかった。

「この掲示板の存在を知っているのはこのクラスの人間だけです。」

そして投稿は授業中」

蔵本がそう言つと、前の席の男子以外のほとんど全員が、こちらを見ながら、囁き合い出した。

「この掲示板には、アクセス解析機能もついています。文化祭の運営係だった飯原さんにパスワードを聞いて、確かめたところ、アクセス解析では、HA208という機種が、いずれの投稿にも使われています。つまり、このクラスの中で、HA208を持っている人間が、誹謗中傷を行いました」

囁き声が大きくなり、クラス全体ではもう、普段のしゃべり声と大差なくなっていた。

綾が自殺未遂した直後、いじめ調査に燃えていた担任は、

「全員、携帯電話を机の上に出せ！」
と言った。

そこで初めて、直は、蔵本の意図に気付いた。

平常心を装つて、携帯電話を探す。

鞆の中の、一番上に、これみよがしに入れてあった。

吐き気がこみ上げてきた。そういう、ことか。

「どうした、阪井」

ふと顔を上げると、全員がこちらを向いていた。それぞれの机の上には、携帯電話だけが置いてあった。

「いえ、なんでもないです」

机の上に、携帯電話を、載せた。

担任が、一人一人の携帯電話の機種を確認していく。

YE890、IR002、ML103。

声が、どんどん近づいてくる。心臓の音がうるさい。

前の席の男子がパスした。必然的に、教室の隅、一番最後の人間の機種は……。

「HA、208」

「ち、違います！」

直は、すぐに反論した。

「だ、だって、ち、ち、違います。おっ、おかしいじゃないですか。あ、綾と私は、友達で……せ、先生だって、クラスの人だって、わかってるはずですよ！」

激しい憤懣が沸騰し、言葉がつつかえつつかえでしか出てこない。「理由ならあります。飯原さんと、阪井さんは、中学時代からの友達でした。けど、阪井さんは、男女分け隔てなく人気のあつた飯原さんとだけ仲がいいことが原因で……」

「蔵本っ！ てめえ……！」

立ち上がった、椅子を掴んだ。その椅子を蔵本に向けて投げつけようとする、後ろから羽交い締めになされた。倉田と、安井と……担任、だった。

「いじめられていました。それを阪井さんはずっと、逆恨みしていたみたいです。二人と同じ中学だった人に、聞きました」

「古山先生！ これはいじめじゃないんですか、推測で全部私のせいにして！」

「推測じゃありません。今日、授業中にあのサイトへ投稿できたのは、保健室でずっと休んでいた、阪井さんだけです。そして昨日も飯原さんに、とんでもないメールを送っていたみたいです」

「適当なこと言うな！ 私の携帯は昨日から、どこにも無くなつた！ お前が盗んで送ったんだろうが！」

三人がかり押さえつけを引きずりながら、蔵本に近づく。蔵本は薄笑いを浮かべた。

「いい加減にしろ、阪井！」

そこで、担任の力が一層強くなり、前に進めなくなった。そして近くの机の上に、組み伏せられた。

「違う、私じゃない！」

言い訳にしか聞こえない言葉だろうと、絶対に、認めるわけには行かなかった。

「綾、違う、ねえ、綾、何か言ってよ、私がそんなことするはずないって。だって、だって、昨日、一緒に頑張ろって……！」

綾の方に首をねじ曲げ、叫んだ。

視界に映った綾は、涙の跡が頬に出来ていた。直の視線を受け、見るからに困惑していた。何かを言おうとするが、言葉にできないようだった。そして最後には、俯いてしまった。

直は肘打ちを担任にかまし、手首を掴む力がゆるんだところで押さえ込みをふりほどいた。自分の机の前で携帯電話と鞆を掴み、教室を飛び出した。

駐輪場で自転車の鍵を外していると、突然背中を蹴りつけられた。アスファルトに転がり、受け身を取った手が、思い切り擦りむけた。目を軽くつぶったら、今度は背中に靴の感触が落ちてきて、開いた口から涎が垂れた。

「立たせてあげて」

安井と倉田に無理矢理立たせられ、体育館の裏手に押しやられた。蔵本は、体育館を取り囲む通路に座った。その前に跪かされる。

蔵本はさして楽しくもなさそうに、無表情でこちらを見下ろしている。手に持ったカッターの刃を出し入れしながら。

「もう少し付き合ってね」

蔵本が直の目を真っ直ぐに見て、言う。

「何だよ、まだやり足りないのかよ……！」

「いい、口答えしないで、したら次は、飯原をやるから。あ、それと、これから私が言う言葉には、必ずはいで答えてね」

直は、舌打ちした。

「何でお前なんかの言葉に……」

「だからさー阪井、日本語通じてる？ あいつを閉鎖病棟送りにしてやつてもいいのかって聞いてんの」

直は黙った。黙るほか無かった。

「三ツ葉中学のAさんの証言。阪井直の裸の写メを、飯原綾以外のクラスの人間、三十五名に、一斉送信してあげました。その画像は、男子を中心に、中学全体、そして校外にまで広まりました。それは

児童ポルノ扱いされて、摘発者も出ました」

黙っていると、脇腹を蹴飛ばされた。それでも黙っていると、これみよがしにカッターの刃を出す音が聞こえた。

「はい、は？」

「はい」

「Bさんの証言。ある日、画像で我慢できなくなった三年生の先輩たちに、阪井直をプレゼントしてあげようと思いました。だけど、巡回に来た教師に見つかりそうになったため、挿入の寸前で中断せざるを得ませんでした。けれど、口に突っ込んだ先輩だけは、射精することができました。無理矢理、精液を飲ませることもできました」
蔵本を睨むのをやめて、目を閉じる。

「……はい」

「Cさんの証言。阪井直は、脇腹に大きなやけどの後があります。それは、燃えた布を体に押しつけたときに出来た傷で、阪井直が涙を流して許しを乞う姿は傑作だったということでした」

蔵本の平坦な声に、過去が次々に暴かれていく。好きなだけやらせておけばいい。すぐに飽きる。

「他にもいっぱいあるけど、めんどくさいから後は勝手に思い出して。本当、聞いてて楽しかったよ。私も結構残酷なことやってきたかなーとか思ってたけど、とんでもないね。上には上がいる。阪井の自信は、いじめへの慣れが背景にあったわけだ」

カッターの刃が出し入れされる音。

「こんな奴のために働くなんて、下僕も大変だね」

横に立つ安井に向かって呟く。

人差し指を掴まれ、何の躊躇もなく反対に曲げられた。同時に口を塞がれ、情けない悲鳴が、口から漏れ出るのを防がれた。そして折った指を掴んだまま、また違う方向に捻じられる。あまりの痛みに体をよじりながら、痛みを耐える抛り所が欲しくて、歯を食いしばろうとしたが、それさえも許されなかった。喉奥に指を突っ込まれ、口を閉じられなくなった。何度もえずいた。苦しくて、しょう

がなかった。指と喉を責められ、それ以上我慢はできなかった。

「自分から私らに向かってきた癖に、この程度で泣くなよ。気持ち悪。そう、お前ってさあ。ほんっと、気持ち悪いよね。なんか自信ありげに突っかかってくるからバツクでもいるのかと思ったら、それもない。単に、綾ちゃんの悪口は許さない、レベルの話でした、と。いじめられたことのある奴って、だいたい、目え見ればわかるんだよね。烙印が押しつけられてんだよ。弱いくせに虚勢張ってるお前みたいなの、一番イラつくんだわ。自分を守りたかったら頭使えよ。無策で粹がつてるからこうなる。でもまあ、頭使って守られても苛つくんだけど。よく、いじめられたらやり返せとか言うじゃん？ でも、矢崎とか阪井みたいなのにやり返されたらたぶん、殺しちゃうなあ、私だったら。そしたら、無責任にやり返せって言った奴は、殺されたガキの両親に、どう言い訳すんだろうな？ そういう精神論者が大勢を占めてるうちは、ホント、楽。表面は『いじめる人間は最低だ』とかのたまって、腹の底じゃあ『いじめられるほうに原因がある』って思ってる。そんな連中のおかげで、今までチクられたことねえわ」

「飯原さんもひどいよね。携帯が盗まれたって話、みんなにとっては確かに言い逃れに聞こえて、リアリティがなかったけど、飯原さんだけは違はずでしょ？ ああ、昨日の夜のは直のメールじゃなかったんだ、よかった……。そんな風に思えないなんて、飯原さん、ちよっとおかしいよね。あ、でも、飯原さん、あのあと、普通に部活行ってたなあ。阪井さんのこと、追いかけてもしないで。阪井さんは飯原さんのことを想ってるけど、飯原さんは阪井さんのことなんて、どうでもいいみたい。だとしたら、すぐに、助けてあげなかったのも頷けるね。同性愛者なんて疑っちゃって、飯原さんに悪いことしたな。それは阪井さんだけだったんだ」

「矢崎が退学してから退屈だったんだけど、いい暇つぶしになったよ。私、阪井をいじめてた奴にいろいろ話聞いたからさ、今度登校してきたら、トラウマを抉り出して切り刻んじゃうかもしれない

だ。阪井だつてさ、またあんな最悪なもの飲み込まされて、淫乱呼ばわりされて、周りの人間の歓声聞いたりなんかしたくないでしょ？ 廃人になりたくなかったら、おとなしく退学したほうがいいよ」

解放されたあと、蔵本たちの顔は見ず、駐輪場に戻った。

帰宅したあと、玄関で靴を脱いでいると、介護部屋から、点々と下痢混じりの便が落ちているのが目に入った。その便を追っていくと、トイレに着いた。ドアを開けた。

そこでは、いつもは穏やかに微笑を浮かべている祖母が、便器に手を突っ込み、その、下痢混じりの便を、おいしそうに咀嚼していた。

直はドアを閉め、二階に向かった。それから、部屋に、閉じこもった。

08 飯原綾

綾が自殺未遂をした、と直から聞いたときは、意味が分からなかった。

成績は毎回学年で五位以内、部活でも大学から視察対象になっているほどで、そのうえ人望があつて、芝原にも好かれている。

自殺の原因を考えれば考えるほど、分からなかった。

何が、気に入らない？

その状況で自殺するなら、全ての面においてあなたに劣っている自分は、何なんだ？

あなたより劣る自分は、生きている価値がないとでもいうのか？理由はどうでもいい。一瞬でも激しい嫌悪を抱いただけで、人は人を嫌いになれる。そのことを、柚樹は初めて知った。

そして、高校生活のほとんどを一緒に過ごしてきた人間が、見るからに調子を崩していくなか、一瞬の嫌悪に身を任せて人を嫌い続けると言うことが、案外、辛いことだということも。

昨日の着替え中に、澤山が、綾のバツシユの隠し場所を、部員に對して喋っていた。もう廃棄していたのかと思つたが、オークシヨンに出品して小金を稼ぐつもりらしい。家に置いていたら母に見つかったので、今年廃部となつた剣道部の部室に移したということだった。母親に言い訳できない程度で隠すなんて、小悪党の澤山らしい。蔵本だつたらそんなこと、意にも介さないだろう。

昼休みに元剣道部の部室に行つてみると、その入口はドアノブが取られていた。少し考え、野球部のグラウンド側に回つた。すると枠だけになった窓があつた。そこから中に入った。

ガラスをなるべくよけて歩く。部屋の隅に、確かに、綾のバツシユがあつた。入学して間もないころ、二人で、買いに行ったバツシユだ。綾は、一年の頃は、体育館シューズをボロ雑巾にしてから、

中学時代のバツシユを使っていた。二年生から履き始めたこのバツシユは本当に大事に使われているが、そろそろ寿命も近づいている。柚樹はバツシユを持ち上げた。

飯原綾の名前は中学時代から有名だった。自分と同じ高校に入ると聞いて、自分なんかとは住む世界の違う人間だろう、と思いながら、クラス発表の掲示板を眺めた。

出席番号一番の青野柚樹のすぐ下、出席番号二番が、飯原綾だった。教室に入ると、すぐ後ろに、飯原綾がいた。

最初の退屈なホームルームをやり過ごし、少し部活を見て帰ろう、と思って鞆を持ち上げると、後ろから声をかけられた。

「ごめん、ちよつといい？ ……ですか」

取ってつけたような敬語を使い、飯原綾が声をかけてきた。口調がなれなれしかった。飯原綾に対しては、僻みみたいな気持ちも最初から抱いていたので、そう感じたばかりかもしれないけれど。

「うん」

戸惑いながら返事をする、

「青野さんって、バスケ部志望？」

意外な問いが返ってきた。

「そうだけど……どうして？」

「えっと、覚えてない？ 青野さんの中学と、一回、試合したんだけど」

忘れるも何も……と思ったのを覚えている。

飯原綾を中心に作られたあのチームは、県内では常勝無敗だった。柚樹の中学も他に漏れず完敗だった。

そのことを話すと、

「チームメイトに恵まれたただだよ」

と苦笑いして、

「青野さんのことは、あの中学で一人だけ良い動きしてたから覚えてた。みんなが、大差つけられて、勝てる訳ないって感じで、苦笑

いしながらだらだら走ってたのに、一人だけ、集中力を切らさないで、声を出し続けて、チームメイトを鼓舞してる人がいて。同じポジションだし、私も負けてられないって思って、あの試合はすごく良い動きが出来たんだ」

”あの”飯原綾に誉められて、悪い気はしなかった。そのときは、少し、嬉しさが表情に出てしまったかもしれない。

そしてそのあと、体育館での部活と一緒に覗いてから、帰りにスポーツショップへ寄り、バスシュを買った。

蔵本の狙いはきつと、初めから、直だった。途中まで、追い詰められていたのは、綾だったから、気付けなかった。

直が狙いだったら、止めていた。綾ならば、構わないと思っていた、はずだった。

けど、と、綾の大切なバスシュを抱えながら、思う。綾がいじめられるのは構わないと思ってきたはずなのに、綾がバスケット部でいじめられているのを見ても、すっきりしなかった。嫌みの一つを言うてみても、楽しくなんてないことに、すぐ、気付いた。そして間の悪いことに、綾が、直を信じきれなかった瞬間から、いつも自信に満ちあふれ、周りから一目おかれていたはずの「飯原綾」は、ただの「2年A組の飯原さん」という存在に成り代わった。

バスシュを右手に持ち替え、苛々しながら剣道部の部室を出て、教室棟へ歩いた。

……違うだろ。そうじゃないだろ？ あんたを嫌悪したのは、「2年A組の飯原さん」が自殺未遂をしたからじゃない。すべてにおいて自分の能力を凌駕する、あの「飯原綾」が自殺未遂をしたからだ。這い蹲ってる人間を顧みもしないで、自分から、その才能を打ち捨てるような真似をしたからだ。

そんな、周囲の視線ばかり気にして、おどおど目線を泳がせているような奴を……どうやって嫌い続けろって言うんだよ。

柚樹は、澤山に気付かれないよう、放課後までどこかにバスシュ

を隠しておこうと思い、体育館に向かった。体育館には、昼休みを利用して遊んでいる学生がいっぱいた。一番ステージに近い入口から入って、裏手に潜り込んだ。そこは陽が届かずに薄暗く、掃除用具がごちゃごちゃと突っ込んである。そのステージ裏の隅、モップの上に、綾のバッシュを二足揃えておいた。

何やってんだろ、今更。軽くため息をつき、柚樹は引き返した。ステージ裏から出ると、そこに、芝原が立っていた。

あまりに唐突だったので、何も言えず、ただただ立ち尽くした。すると芝原が先に口を開き、笑いかけてきた。

「青野が昼休みに来るなんて、珍しいね。練習？」

「芝原のほうは？ 練習？」

あからさまに話題を逸らしたが、芝原はさして気にする風もない。他の部員に見られていたって言い訳できないのに、芝原の前では、余計だ。顔が熱くなっていくのがわかる。

「そうそう。高校から始めたばかりの下手くそは、練習しないと」「頑張ってるよ、ね、いつも」

「こんなにやってても、飯原には敵わないんだけどさ。まだ一回も勝ったことない。負けてばかりは悔しいから、とりあえず、練習」「綾は半端じゃないから。しょうがないよ」

柚樹はそこで芝原に背を向け、会話を放棄した。

09 強情

直が学校に来なくなってから一週間が経った。綾は部活にも行かず、学校が終わるとすぐ、帰宅するようになった。柚樹は……時々、綾の事を、心配そうに見ている。今さら、謝れないし、優しい言葉も掛けられない、という感じた。

聡美は、視線を英語教師の背中に向けていた。席替えして列の後方に移ってから、どうしても視界に、蔵本の背中が映る。無防備な背中を見るたびに、手に持ったシャープペンを握り締め、そのまま突き刺してやりたいと、沸き立つものがあつた。でも今は、こいつを相手にしている場合じゃない。直に、綾に、何を、してあげられるか。それだけを考えていればいい。

でもそんなことを考えた所で、と思う自分もいる。

自分の場合は、家に帰れば、歳の離れた可愛い盛りの妹と、歳が近く馬も合う兄と弟、程良く愛情を注いでくれる両親が、居る。他の三人には、それがない。

今までの受け答えを思い出せば、ある程度は家庭の事情も分かる。綾にはたぶん、母親以外の身寄りがいない。直は両親がいるが、祖父母の介護を巡って家庭内の対立が激しい。柚樹は、優秀な弟にかかる期待から、家庭では顧みられることがない。自分が普通なんだ、綾たちが苦しい状況にあるだけなんだ、と思っても、変な罪悪感や劣等感が、ついて回ってくる。

そんな中途半端な気持ちを抱えて、人並外れて動きが鈍い自分なんか、一体何が出来なのか。環境においては、どう足掻いても、綾や直、柚樹と相容れない部分があるから、とんでもなく見当違いのことをしてしまう可能性だってある。

それに、悩むより行動、を今やったら、取り返しのつかないことになるかもしれない、そんな肌を裂く空気が、綾の周りには漂っていた。そして、学校に来なくなってから一度だけ、玄関先で蒼白な

顔を見せてくれた直の周りにも。

ぼうつとしていると、英語教師に、指された。留年しないように、嫌な顔を見せずに補習をしてくれる、中年の先生だ。やってきた訳を黒板に書けとの指示だった。

先週言われていたことなど、すっかり、忘れていた。ノートを凝視してみたが、当然、書いてあるはずもない。というか、今日の授業の内容すら一文字も書いていない。

白紙のノートを手には黒板の前に立つ聡美を見かねたのか、先生が単語の下にSVOと書いてそれぞれに線を引いてくれたが、今度はV……Vって何の略だっけ？ とそちらのほうに意識がずれた。それでも、適当な訳をでっちあげる。何もしていないほうが授業の進行の妨げになるからだ。間違えたところで、それが自分の実力なので、何の恥ずかしさもない。

結局、訳は、書き出しの「私たちは」しか当たっていなかった。

蔵本が、聡美に対して何もしてこない理由は、こういうところにあるのだろうと思う。テストで毎回学年トップだった矢崎、それにひけを取らない学力の綾や直で遊んできた蔵本の目にはきつと、劣等生は映っていない。

放課後、英語教師に呼び出され、進級のための条件を、再度、念押しされた。どうにかクリアできる……はずだ。手間をかけさせて申し訳ないとは思うものの、なかなか絵のこと以外に興味は出ない。同じ階にある職員室から二年の教室へ戻る途中で、階段から上がってきたらしい柚樹が、聡美の前を横切った。そのままこちらに気付かず歩き続ける。手には……靴？ スニーカーと似ているけれど、少し違う。部活で使うものだろうか。

「柚樹」

呼ぶと、肩をびくりと震わせた柚樹が振り返った。

話しかけることに躊躇いはなかった。綾と一緒にいる時には無視されたが、二人きりの時には、特に無視などはされていないかったか

らだ。そのせいで、綾の前で自然と柚樹の名前を出してしまい、直に咎められたこともあった。

袖を顔に擦り付けてから振り返った柚樹は、目を赤くしていた。

「蔵本に何か……」

瞬時に思いついたことが口をつく。

「違う」

柚樹はそうとだけ言うと、靴を抱えたまま、教室へ入っていった。聡美も、英語の教科書を取って帰ろうと思っていたので、後に続く靴を、自分のロッカーに押し込んでいる柚樹が目に入った。

「いまさら、部活で綾に味方したとか？」

さつきみたいには、言い返してこなかった。柚樹は口下手だけれど、無表情には徹せない。拳動に出る。

「ホント、いまさらだね。あれだけ無視しておいて」

「分かってるよ！ そんなこと！」

柚樹は、涙声のまま急に怒鳴ったせいか、咳き込んだ。ロッカーに手について咳き込み続ける柚樹の背中を、擦る。

予想通り、柚樹は聡美の手を振り払った。

……強情。

家に帰ると、

「ただいま」

と言うだけで、五つの

「おかえり」

が返ってくる。そのうちひとつは舌足らずで愛らしい。

居間には家族全員が揃い、それぞれ無秩序に食事を摂っていた。社会人である兄の孝史はフローリングに直に座って、ノートパソコンを膝に載せていじりながら、カロリーメイトをもそもそと食べている。聡美の一学年下、高校一年で弟の聡史はテーブルの一角を占め、部活で使うアンダーシャツ姿のまま、見ているだけで胸やけるほどの肉の山にがついている。父の敬三はソファに座ってイカ

の塩辛をつまみつつ、テレビを見ていて、母の優子^{ゆうこ}は弟の席の正面で、最近凝っている精進料理を、静かに口へと運んでいた。背筋が綺麗に伸びた母の右隣の席には、小さな皿と食べかけのスパゲッティ。

こついうのを見ているだけで幸せになっってしまう自分は、変だろ
うか。

「お腹減った」

足にまとわりついてくる乃亜を抱きあげながら、母に向けて呟いてみる。乃亜のほっぺたに自分のほっぺたを合わせると、恐ろしいほどの柔らかさを感じることが出来た。

「台所に置いてあるよ。冷めると不味そうなのは自分で温めて」「はい」

乃亜を母の右隣の小さな椅子にさせ、そのまま台所に向かった。台所には、ご飯に、鰯の酒粕漬け、肉じゃが、インゲンやキャベツやトマトで彩られたサラダ、それにワカメと豆腐のみそ汁が置いてあった。母の凄いとこころは、人数分、それぞれの好き嫌いを把握した食事を、こともなげに作ってみせる所だ。そのうえ、さほどお金がかかっていないはずなのに、おいしい。

みそ汁とご飯にラップをかけ、電子レンジで温めながら、居間の様子を眺めた。快適に過ごせる自分の部屋があっても、家族みんなが面白く感じるテレビ番組なんてものが存在しなくても、家族がなんとなく集まってきてしまう、部屋。

食事を終えた聡史が、食器を台所に持ってきた。聡史は食器をシンクに並べて水を注いだ。

「聡美、来週の土曜日、空いてる？」

「空いてるよ。なんで？」

「映画、見に行かない？ 聡美も見たいって言ってたやつ。俺もその日、珍しく練習が休みでさ」

見たいって言ってたやつ、とは、先週あたりに封切りとなったオリジナルアニメーション映画だ。新作を公開すれば大抵ヒットを飛

ばず、国内の有名会社が制作したもの。

本当は、綾と直、それに柚樹と行くつもりでいたけど……。

「いいね。行こうよ」

「カップル割引っていうのがあって、それだと千円で見れるらしいから」

「聡史、子供っぽいからなあ。そんな関係に見えるかな」

「それを言うなら、聡美のほうが……」

「その突っ込みは無しで」

俯きながら小さな声で呟くと、聡史が笑いながら居間に戻っていく。兄や父と違い、テレビ嫌いのはずの聡史は、そのまま部屋に戻るでもなく、鞆からミュージックプレイヤーを取り出し、居間の隅に寝転んだ。

使い古された電子レンジが、間の抜けた音で加熱の終了を告げた。

聡美は誰にも気づかれないように、小さく笑みを零した。

帰宅前までの陰鬱とした気分が少し、薄らいでいるような気がした。

10 気付かないふり

模試で一段階評定の下がった弟の機嫌が悪く、もちろん、あいつだけに期待のすべてを懸けている両親も機嫌が悪かった。きつと何か嫌なことが起こるだろう、というような雰囲気だった。朝から、気分が乗らなかった。

今まで、そう感じた時は、無断で学校を休んできたし、今回もそうするべきだった。

それでも登校した理由は、部活を休み、周囲との関わりをほとんど断っている綾に、どうしてもバツシュのことが言い出せなくて、そのまま帰ってきてしまったからだ。そして今日もなんとなく渡しそびれてしまった。

そのまま部活の時間となり、練習前のウォーミングアップを始めた。

マネージャーがホワイトボードに書く今日の予定を横目で見てみると、芝原に名字を呼ばれた。体育館ステージの手前で、芝原が手招きしていた。

「これさあ」

と芝原が持っていたのは、綾のバツシュ。心臓が軽くはねた。

「昨日の後片付けの時に見つけたんだけど。青野だろ。そこに置いたの。昨日の、昼休みの時」

「うん」

「飯原が練習に来ないのは、履くものすらないから？」

「あ……」

「最低だな。青野だけはそんなことしないと思ってたのに」

血流が脈打って、顔が赤くなっていくのが分かる。

「バツシュは俺が飯原に返しとく」

「ち、違っ……」

声がかすれてしか出ない。綾のバツシュをその場に置き、練習に戻っていく芝原の背中を止められなかった。

……これは澤山が、新品としてオークションに出して、小遣い稼ぎをしようとしているだけ。くだらないことをしているのは澤山たちで、私は関係ない。

普段から喋るのが得意とはいえない自分が、芝原の前で、そんな言葉をすらすらと吐き出せるわけもなかった。

芝原と喋るようになったのは、入部してすぐの頃だった。顧問は、入部した時から部内で一人だけ別格の綾に、特別メニューを課していた。他の部員は無理しなくていいぞ、と言われていたのに意地になって、綾と同じメニューをこなした。淡々と、地獄のようなメニューをこなしていく綾に負けないよう、必死に追いすがって、やっぱり到底こなせなかった。十分間のインターバルが入り、早速、体育館裏でバケツに向かって吐いていると、背中を何度か軽く叩く手があった。女子部員の誰かかと思って

「ありがとう、もう落ち着いたから……」

と礼を言つと、

「すごいな、飯原さんと同じ練習に挑むなんて。えげつないよね、飯原さんの練習量。男子でもかなりきついよ」

返ってきたのは男の声だった。慌てて手の甲で口周りを拭い、バケツを、その声の聞こえた方から遠ざけた。

男が笑った。

「隠さなくていいじゃん」

「隠すよ、普通」

「必死にやった結果なの？」

「血へド吐いたなら堂々と見せるけど。これは、今日の昼ごはんだから」

男がまた笑った。

「俺、芝原。そっちは？」

「青野……」

「青野さん。明日、どっちが涼しい顔で飯原さんの練習量をこなせるかで、勝負しない？」

「何、それ。誰が判断するの？」

「飯原さんが」

翌日の練習では、練習の時々芝原のほうを見た。すると不思議なことに、かろうじてではあるものの、綾の練習に、ついていくことができた。

練習後、綾は困った顔で、「引き分け。どっちもすごく苦しそう」と判定した。芝原と、お互い顔を見合わせて笑った。その、ひたすら苦しそうで、ひたすら楽しげな笑みを見たときにはもう……好きになっていたと思う。

芝原に投げかけられた一言がいつまでも頭にこびりついて、離れなかった。練習をする気力が削がれた。顧問がまだ来ていなかったのも、バッシュを持って引き返した。

部室には澤山と他数名がいて、煙草をふかしながら雑談していた。柚樹は特に驚きもせず、その光景を受け入れた。綾が立場をなくしてから、澤山たちを抑えつけていた枷が、外れていたからだ。綾を特別扱いしてきた顧問も、綾が影響力を失うと指導力不足が目立つようになった。

ここはもう、部として終わった。

部室備え付けの水色のベンチに座っている澤山たちを無視し、着替える。

「青野さあ、部室に置いてあったバッシュ、どこやった？　なんかアレ、変なプレミアついてて、一万五千とかで売れそうなんだよねー。まあ大した金じゃないけど、貰えるものは貰った方がいいじゃん？」

「空箱でも送れば？」

ジャージを脱いでワイシャツを羽織りながら、返す。

「今さら飯原についたってしょうがねーだろ。さつさと言・え・よ」
「知らない」

「青野、その調子だと煙草のことも話しそつだよね。今のうちに痛い目見とく？」

「あんたらがヤニ臭くならうが歯が変色して余計に小汚くなるーがどうでもいい。なんで私が、あんたらの更生を手伝ってやんなきゃなんないの？ くつだらない」

「何、私たちが仲間でするんのがそんなに羨ましい？ そつだよね、抜け殻二人と最底辺の劣等生、あんたにはそれしか友達がないもんねー」

制服に着替え終わり、バツシュをカバーに入れていた途中で、澤山が、言った。

無視して部室を出ることは、なぜだかできなかった。

「一人は言うまでもないけど、一人は中学時代にマワされて頭がイカれちゃった引きこもりだし、もう一人はなんか独りで絵ばかり描いてて気持ち悪いだけの存在だし」

「お前があいつらを語るな」

売り言葉に買い言葉で、反射的に言葉が出た。微かに澤山が怯んだのが感じられた。目付きが悪いと、散々両親に嫌悪されてきた両目が、役に立っているようだった。

「あれ？ 自分でもあれだけ無視しといて、今さら怒る？ それって人としておかしくない？」

部活中も、特に申し合わせもせず、澤山に同調して綾を無視した。部室で、綾に対して皮肉を呟きもした。それは、ついこの間のこと。せめて部活中の味方になっていれば、綾の憔悴は少しでも和らいだはずだ。綾が直を疑うこともなかったかもしれない。

分かってる。

それでも、柚樹は一步、澤山の前に踏み込んだ。訝るような目つきで見上げてきたその横面を、手に持っていたバツシュで引っ叩い

た。澤山の手から、煙草の吸い殻が落ちた。

続いて掴みかかろうとすると、脇腹に、澤山の仲間の爪先が入った。部室には、柚樹以外に四人いた。うずくまりかけると、今度は髪を引っ張られた。一人が煙草の吸殻を拾い上げる。どの部員にも、表情がなかった。

掴んでいる奴の手に思い切り爪を立て、髪を掴む手が解けると同時に、部室の扉を押し開き、外に転がり出た。

さすがに、殴る際に落としたバツシュのカバーは、拾う暇がなかった。

バツシュは鞆に入りきらず、そのまま持って帰るのもなんとなく億劫だった。鍵付きの教室のロッカーに入れておこうと思い、昇降口に戻った。

靴を脱ぎ、上履きに履き替える。そこでふと、煙草の吸い殻を拾う部員の姿を思い出した。徹底した無表情。人が何かに加虐する時の、顔だ。両親や弟がこちらに向けるものと同じ……。急に怖くなってきた、昇降口で一旦、うずくまった。

澤山は小悪党だ。蔵本のような事はしない。澤山の仲間に囲まれかけたいまもまだ、その侮りは、正しいと思っている。

けど。蔵本は。やり切った。矢崎に対して、綾に対して、直に対して。

前に標的にされた矢崎が、肉体的に罵られる現場を目撃したことのあるのは、たぶん、学校の中でも自分だけだ。圧倒的な暴力を何のためらいもなく他人へ向ける蔵本と、恒常的に言葉の暴力を向けてくる家族とを、重ねた。

……だから、歯向かわなかった。綾が起こした自殺未遂への憤りを、逃げ道にした。牙を自ら引き抜いて、へりくだった鳴き声を発しながらお腹を見せて、媚びた。蔵本たちはそんなこちらの様子を見てとっていただろう。陰で馬鹿にしていただろう。でも、歯向かうことはできなかった。これまで生きてきた中で、焼金のように押しつけられた劣等感と被虐の記憶が、蔵本に対しては絶対に従順で

いと警鐘を鳴らし、邪魔をした。

こちらの情けない態度を蔑みながら、直は、綾を守るため、蔵本に立ち向かった。そして、壊されてしまった。

階段を上る。二年生の教室は三階だ。

途中、仲良く下校する女子生徒二人とすれ違った。そのうち一人が直とよく似た佇まいをしていたので、思わず振り返る。しかし、別人だった。また、足から力が抜けた。手すりにつかまり、堪える。綾とバッシュを一緒に買ったとき。入部してからいつも綾に負けないように練習をし『柚樹とやっていると、バスケ、楽しいなあ』と嬉しそうに言ってもらえたとき。同じ量の練習をこなしているはずの綾と芝原の上達についていけず絶望したとき。楽しげに芝原とのワンオンワンをこなす綾に激しい嫉妬を感じたとき。直が、彼女なりのやり方で自殺未遂後の綾を慰めているとき。安井たちの言葉に晒される直を、綾が連れ出したとき。直の携帯電話から、綾の携帯電話に中傷メールが送られていると発覚したとき。本当に直が送ったのか聞きもせず、綾が、直でなく、蔵本の言葉の方を信じたとき。そして芝原から浴びせられた『最低だな』。

色々な記憶が干渉し合う。手すりに掴まり、立ち上がった。バッシュを握り直して教室へ向かうと、

「柚樹」

と後ろから呼び止められた。聞き慣れた心地いい声。

そこで柚樹は初めて、自分が泣いていることに気付いた。袖で拭ってから、振り返る。

「蔵本に何か……」

「違う」

それだけ言つて、教室に入った。ここで聡美と接したら、絶対に、甘えてしまう。なるべく、話をしたくなかった。

「いまさら、部活で綾に味方したとか？」

今はその話をしないで。暗にそう伝えるため、ロッカーにバッシ

ユを突っ込んで、思い切り閉めた。

「ホント、いまさらだね。あれだけ無視しておいて」

聡美が言っていることが正しいと分かっている、今は。

「分かっているよ！ そんなこと！」

嗚咽を噛み殺しながらの状態で、咄嗟に叫んだせいで、むせた。

そのうえ唾液と鼻水とが混じり合って喉奥を苛み、一気に息苦しくなった。ロッカーに思わず手をつく。

すると、今の今まで怒っていたはずの聡美が、背中をさすってきた。

今すぐ聡美に、綾に、直に、謝りたい。でもそんなことをしたら、泣き喚いて、ひたすら聡美に謝り続けてしまうような気がした。これまで、人付き合いの中で引いてきたラインを越えて、誰にも見せてこなかった、自分の醜態をさらすことになる。

気付けば、聡美の手を振り払っていた。

今日は午後九時から午前二時まで、深夜バイトが入っている。それまでの時間を潰すため、柚樹は、適当に駅ビルの中をぶらついた。ここは直と二人できた、あそこで聡美が突然すっ転んだ、あの映画館で、綾と聡美が楽しみにしている新作のアニメ映画を見る予定だった……。

そんなことを考えてしまっている自分に嫌気がさした。きっと、何も目的を持ってないからだ。そう思い直し、駅ビル内のATMから、支給されたばかりのバイトの代金を引き落とし、その中から、三千円を、自分用にした。

いつもは、バイトで稼いだ金は全て親に吸い上げられ、弟の快適な受験環境のために使われる。小遣いは、存在しない。毎年のお正月に、父方のおばあちゃんが、表向きのお年玉、母に奪い取られる三千円とは別に、母の見ていない所でこっそり包んでくれるお金、五万円を、切り崩して使っている。服、お菓子、雑誌、シャンプー、

歯ブラシ、食費や学費以外のすべてを、一年間まとめて、その五万円に頼って生きている。母は、いったいどこから金が湧いて出ているのか、いつも疑心暗鬼の目でこちらを見る。

柚樹は、洋服などを見たあと、CDショップに入った。買いたいものがなければ、洋服にしようと思ったが、店の隅のインディーズコーナーに、自分が唯一、気に入っている女性シンガーソングライターの、新譜が出ていた。疲れた時に、生きていく力を分けてくれる人だ。普段は、インディーズを多くそろえているレンタル店で、半額の日にまとめてレンタルして、テープに録音している。この歌手のよさを知って欲しくて、以前、レンタル期限内に、直へ又貸しをしたこともあった。……まだ、感想は、聞いていない。

新譜をレジに持って行く時、少し躊躇った。けれど、自分で稼いだものを、たまには自分のために使ったって、罰は当たらないだろう。

それから、コンビニのバイトに行った。深夜、誰もいない店内で行われる店長の性的な接触は、段々とエスカレートしている。学校の目を逃れられて、時給がそれなりによく、バスケットのすり合わせに融通が利き、かつ無理なく行き来が出来るようなバイト先は、なかなか見つからないので、我慢していた。

今日は商品の入れ替えをしている際に、背後から抱き寄せられ、勃起したものを腰のあたりに押し付けられた。すぐに突き飛ばし、睨んだ。しかし店長は笑う。こいつは、こちらの嫌悪を、勝手に、照れ隠しだと受け取っている。

でも今日は、いつものように沈み込まないで済んだ。買ったCDがあるからだ。頭の中に、前作のアルバムの曲を思い浮かべながら家路を急ぐ。足早に。それでいて、遠回りでも、なるべく暗い道は通らないように。

家に帰ると、まだ電気が点いていて、玄関の鍵も開いていた。家に入っただけ、玄関に敷かれた絨毯の上でぶつぶつ独り言を言いな

がら立っている母に気付いた。母もこちらに気付くと、右手を差し出した。

鞆に入れていたバイト代、六万九千円を、渡す。本当は七万二千円だった。

お札の枚数を数えていた母は突然、居間に取って返した。今のうちに自分の部屋に逃げよう、と思って靴を脱いで家に上がった。しかしそこで母が、戻ってきた。

「待ちなさい！ 計算が合わない！」

母は深夜三時も近いというのにヒステリックな声を上げた。

「給与明細を出せ」

「今月はまだ、貰ってない」

肩から提げた鞆に、母が取りついてきた。青筋が浮き立って見える。

「今すぐ出せっ！」

「やめて！」

母よりもずっと腕力は強いはずなのに、うまく引き剥がせなかった。

結局、柚樹のほうから、手を離れた。揉み合いになって、少しでも暴力的な態度を取ってしまうと、後で母が大騒ぎする。そうなる、と、父と弟から、反論を封殺した罵声の集中砲火を受けるのは自分だった。

母は鞆を漁り、折り畳まれた給与明細と、買ったばかりのCDを見つけ出した。

「そういうこと？ そういうこと？ そういうこと？」

問い掛けになっていない問いかけを早口で呟きながら、母は給与明細を放り捨てた。

「可愛い弟が大変な思いをしてるこの時期に、大切なこの時期に。このくだらないゴミに三千円もつき込んだってわけね。そう。そう。そう。そうか……」

「くだらなくなんか……！」

「うるさいっ！」

母はCDを床に叩きつけた。

「くだらないくだらないくだらないくだらないくだらない！」

母は、くだらないと言ったたびに、子供の地団太のように、CDを踏みつけた。

「それ」

「黙れ！ 口を開けんじゃねえ！ 誰が喋っていいって言った！」

「それ、は」

拳が飛んできて、何の準備もしていなかった腹に叩き込まれた。

柚樹は、よろめき、壁に背中をぶつけた。そのまま、襟首を掴まれ、締めあげられる。

「お前みたいな低IQのクソガキは日本語も通じねえのか？ お？ 通じねえのか！ 通じねえのかよって聞いてんだよ！」

言葉の度に、母は手を激しく前後に揺らし、柚樹は何度も壁に後頭部をぶつけた。柚樹は泣きそうにながら口を開いた。

「お母さ……」

「お前はその呼び方を使うなって何回言った！ 何回！ 何回だよ！ 答えるよクソガキ！」

「くる……し……」

締めつけが明らかに強くなっていく。頭に血が行きわたってないのが分かる。呼吸がうまくできない。

意識が飛びそうになった所で、ようやく母の手が離れ、柚樹はその場にくずおれた。

「謝罪するつもりがあんなら、今すぐ一万、持って来い」

「来月まで、待って……今は」

「用意できないなら今すぐ出てけ。援交で稼いで来いよ。今までこそっから洋服代、出してんだろ？ てめえなんかを買う奴はよっほどの変態野郎だな」

ふらつきながらも、立ち上がった。

そのまま、玄関に向かおうとすると、廊下から声がした。

「何だよ、もう、目え覚めちゃったじゃん……」

靴のそばに行こうとすると、反対側を向くよう肩を掴んで促された。

「行く前に謝れ」

「何を……ですか」

「何言ってるの？ 一志に対してに決まってるでしょ。おら」

体の位置を入れ替えた母に、背中を蹴りつけられた。

弟の方は、

「そうだね。当たり前だよね」と呟いた。

「は、や、く、し、ろ！」

後ろで母が何度も絨毯を踏みつけた。柚樹はその場に静かに腰を落とし、床に手をつけ、頭を下げた。

「よ……夜中に起こして、ごめんなさい」

後頭部に、何かが載せられた。絨毯に、顔が、押し付けられる。体温が伝わってくるから、きっと、足が、載せられている。

「気持ちが悪くてねえよ」

「夜中に起こして、ごめんなさい」

弟の舌打ち。蹴りが一発。視界が揺れた。

「汚らしい顔、絨毯に押し付けられないでくれる？ ホント、謝ることすらろくにできないなんてね」

「しょうがないよ。だってこいつ、頭、空っぽなんだから」

母と弟、それぞれの声を背に、柚樹は、家を出た。

弟への絶対的服従。そのたびに、自分の中の何かが死んで、劣等感が増幅していく。

柚樹はしばらく歩いて、街灯も月の光も届かない真っ暗な路地に、座り込んだ。

「一回くらい……」

聴きたかった。粉々にされたCDを思い返しながら、呟く。セク

ハラ野郎に耐えて、手に入れたお金を、少し、自分の趣味に、使っただけ。それも、使ったのは、今回が、初めて。今までののは全部、弟の受験費用を稼ぐために、ちゃんと、家に入れてきた。

祖母に貰った五万はもう、五千円しか残っていなかった。母の要求する金額には足りない。

店長の気色の悪い視線にさらされ続けている柚樹は、援交の二文字を、早々に消した。あんなのを相手にするなんて、絶対、できない。次に思いつくのは、冴えない本屋で万引きして、新古書店に売ること。それも、否定した。

本当は、無理して金を稼ぐ必要なんて、どこにもないから。

気付かないふりをしてきた。

弟の一志が、柚樹の稼いだ金をそのまま、自分の小遣いにしていることを。柚樹の稼いだ金は、一志の娯楽のためだけに、全て費やされていることを。柚樹のアルバイトなんてなくても、両親の収入があれば十二分に、受験費用を賄えることを。

だって、それが事実だったら、今の自分が崩れてしまうから。自分が世間体のためだけに高校に行かされていることを、かけらほども愛されていないことを、突きつけられてしまうから。

でも、それも今日で終わり。

……認めないとね。私は誰にも……。

11 洩れ出す声

今日は柚樹までもが学校を休んだ。これまでも無断で休むことは何度もあったが、昨日の放課後、泣いていたのが気にかかる。直はまだ立ち直れそうにもない、綾に話しかけても生返事しかされない、そのうえ柚樹に何かあったら……。

授業に対する意欲が余計に薄まったのは言うまでもなく、キャンバスに向かつてもうまく集中出来なかった。描き始めて十分で、部活を切り上げた。

それは家に帰って乃亜の相手をしているさなかでも変わらず、戦隊もののヒーローに影響された必殺技を、もろに背中にくらってしまった。顔をしかめながら振り返ると、得意げな顔は、怪我を案じる顔になった。心配するくらいなら、最初から蹴るなよなあ。

「いてえなこのやろー」

乃亜の頭をぽんと叩いて、背中を擦りながら立ち上がった。じっとしていても、この気分は晴れない気がした。

自分の部屋に戻って、机の脇にある棚を片っ端から探っていった。中段に目当てのメモ帳を見つけ、ページを手繰っていく。

あった。

制服の上に白色のコートを羽織り、コートポケットへ、携帯電話と財布、それにメモ帳を入れた。

「ちよつと出かけてくる。夕飯までには戻るから」

台所にいる母に声をかけた。

バスに乗って駅まで戻り、財布に入れてある定期を使って、JRの改札に入った。柚樹の乗降駅は、聡美の持つ通学定期の区間内にある。短い間隔で走る鈍行に乗り込んで、二つ隣の駅で下りた。

家から持ってきたメモ帳に書いてある住所を、駅近くの交番で見せて、道順を教えてもらった。歩いて十分くらいの距離だそうだ。

住所に道順が書き加えられたメモ帳を時折確認しつつ、歩く。

夕暮れの陽が気まぐれに見せる、藤色の空が広がっていた。どういう現象なのかは分からないけれど、以前、下校途中の電車内で、柚樹と隣り合わせに座っていたときにも、見た時があった。

——いつもと違うことが起きると、少し、楽になる。

空いっぱいには紫アサガオが咲いたのを見て、そんなことを、柚樹は呟いていた。

住宅街に入った途端、随分と、立派な誂えの一軒家が増えた。綾同様、切り詰められたお金の使い方を見て、聡美が勝手に想像していたような場所ではなかった。都会に迷い込んだ小動物のような気分で、なるべく隅っこを歩いた。

柚樹の家に着き、インターホンを押した。十分なスペースのある庭は、芝草の上に、切り整えられた多種多様な草木が植えられている。その隅のガレージの入口は開いていて、磨き上げられた高級車が三台、見る人が見れば、庭の調和に負けないくらいの魅力を発揮するであろう精悍さで横たわっている。あいにく興味がないので、すぐに目を切った。

ぼうつと庭全体を眺め、この庭を背景にした絵の構図が頭の中に溢れてきた所で、インターフォンに返事があった。たぶん、カメラ付き。方々に設置されている監視カメラのおかげで、一方的に見られることに慣れているとはいえ、なかなか、気持ち悪さは拭えない。「どちら様ですか？」

「えと……突然お訪ねして申し訳ありません。柚樹さんの友人の、小早川と言います」

するとインターフォンの切れる音がして、玄関の扉が開いた。玄関と聡美とを隔てる柵越しに、柚樹の母親と思しき人が出てきた。随分と若づくりで、とても高校生の子供がいるようには見えない。目もと口もとには、皺ですら魅力的に見せることを心得ているような、計算された笑みが広がっていた。

聡美は意識して長いまばたきをした。友人の母親に対して失礼な

ことを考えてしまった。感じのいい人、と素直に受け止めるように努めた。

「ご用件は？」

「あの、今、柚樹さんはどちらに……」

「ああ、柚樹ですか。ごめんなさい、今は出かけていて」

「何時頃、帰られます？」

「そんなに遅くはならないと思いますけど。ちょっと分からないなあ、ごめんなさいね」

「あ、じゃあ、帰ってきたら、この電話番号に折り返しかけるように言ってください」

聡美はメモ帳に挟んであったボールペンを使い、自身の携帯電話の番号を教えた。携帯電話を持っていない柚樹には、以前、同じようにメモ書きを渡したが、一回もかかってきたことがない。もう失くしているかもしれないから、念のため。

「分かりました。帰ってきたら伝えておきます」

「お願いします」

結局最後まで笑みを絶やすことなく、柚樹の母親は聡美に背を向けた。

はあ、と軽く溜息を吐く。

道順を教えてくれたお巡りさんに重ねてお礼を言ってから、その交番の近くに設置してあるベンチに座り、一時間ほどが経った。冬が近づいているからか、辺りもすっかり暗くなってしまった。

そんなに遅くはならない、という言葉を受けて、柚樹からの折り返し連絡をじっと待っているが、一向に、着信はない。

仕方ないので、交番から洩れる明かりを頼りに、先程、庭を見て思い浮かんだ絵の構図を、メモ帳に書き留めて時間を潰した。

「絵が好きなのか？」

暇潰しのはずが興に乗り、庭の一部のデッサンもどきを描いていると、突然、呼びかけられた。

「は、はいっ」

交番で道順を教えてくれたお巡りさんが、近くに立っていた。口に煙草をくわえている。

「あれ……お巡りさん？」

「さっきから声掛けてたんだけど」

お巡りさんは人ひとり分くらいの間を開けて、ベンチに座った。聡美の父親くらいの年代だが、見るからに筋肉質で重量感のある体つきだった。

「あと四時間くらいここに居たら補導するよ」

「あ、はい、さすがにそれまでには帰ります」

「誰かを待つてるとか？」

「友達を」

お巡りさんが腕時計を見た。

「一時間近くも？」

「一時間近くもです」

煙草を手に持ったお巡りさんは、また口もとに寄せて吸い、目を細めてから煙を吐いた。

「ケータイ全盛の時代に古風なこったなあ」

「その友達、携帯電話、持ってなくて。ひたすら来るのを待つというアナログな方法に頼るしかないんです」

「だからって一時間も待つなんて、友達思いなんだな」

煙草の煙が、風にそよいでお巡りさんの後ろに流れていく。

「友達思いではないですよ」

自分でもびつくりするくらい硬い声が出て、お巡りさんも目を少し見開いてこちらを見た。

「あ、いえ、違うんです。お巡りさんに怒ったわけじゃなくて……いま、友達がいろいろと辛い目にあってるんです。それなのに私余計なこととして話をややこしくするのが怖くて、何もできなくて……。切羽詰まってるのは分かってるのに、どうすれば正しいのか、どうしたら駄目なのか、そんなことばかりに囚われて、行動でき

てないんです。どうしたらいいか、分からなくて、本当に」

いまこうして柚樹を待っていることすら、余計な事してるんじゃないかって、怖くて。

お巡りさんのほうを見ず、足元に向かって喋った。

隣で、

「はぁーあ」

という溜息が聞こえた。

顔を上げてそちらを見ると、お巡りさんは携帯用の吸い殻入れに煙草を押し込んでいる所だった。

「こないいい子を泣かせるなんて、大馬鹿野郎だな、その友達ってのは」

「な、なんでそんな結論に……」

お巡りさんは大仰そうに立ち上がった。

「どうにもならなくなったら、相談しに来いよ。交番なんて、そのためにあるようなもんだし。たまには女子高生と茶あくらい飲んだって罰は当たらないだろ」

そのまま交番に戻っていくお巡りさんを、黙って、見送った。

ひとりベンチに取り残された後で、息をするのが、少し楽になっている自分に気付いた。

柚樹はその三十分後に、姿を見せた。改札から吐き出されるサラリーマンに混じった柚樹は、制服姿だった。手には何も持っていない。学校を休んで出かけるにしては、格好がおかしい。ちゃんと捕まえてから話を聞こうとして、声を掛けずに、近づいた。

しかし途中で気付かれた。柚樹はなぜかこちらに背を向け、いまいる南口とは反対の北口に向けて走り出した。つられて追いかける五十メートル走、十秒台の人間が、バスケット部に追いつけるはずはないけれど、ここは幸い、通勤帰りの雑踏がある。

ぶつかりぶつかられながらも、小さい体を活かして、柚樹よりもうまく人々の間を縫い走ることができた。

運動神経がないなりに、休むことなく追いかけて続け、ようやくその背中に近づく。手が届きそうに届かない。出口が近づき、雑踏も混雑が分散している。仕方なく聡美は、目の前を男が横切り速度の落ちた柚樹の背中に、指を伸ばし、触れると同時にその背中を強く押した。柚樹がよろけた。バスケットで鍛えた体幹のおかげか、倒れはしなかったが、それで充分だった。聡美は夢中で柚樹の背中に飛び付いた。

今度はさすがに潰れた。柚樹がコンクリートに直にうつ伏せになり、聡美がその背中に覆いかぶさるような格好になっていた。普段から全く使っていない生白い足がぐくぐくと震えて全く動かない。夢中で酸素を取り込む。

今いるのは、駅から出る寸前、雑踏が全くなくなる場所だった。今うまく捕まえないければ、逃げられていた。お互いに息を整えた後、聡美が先に背中から退いた。気付けば周りから不審者を見る目を向けられていた。それは、そうだ。こんなに往来のある場所で、うつ伏せになっていたら。

顔が熱くなってきた、すぐに柚樹の手を取って助け起こした。柚樹はこちらを見もせず、歩き始めた。

少しして、五番と記されたバス乗り場に備え付けの、ベンチに着いた。駅から一番離れた場所にある。柚樹はベンチの奥側に座った。「疲れたね」

聡美は呟きつつ、バス乗り場の時刻表を眺める。駅からの光で充分、文字は読めた。携帯電話が表示する時刻と照らし合わせると、経由便はもうなかった。あまり人が通る心配はない、ということだ。「何か用」

「用がなければあんなことしないよ」
柚樹の発した素っ気ない声に対し、こちらまでできるだけ素っ気なく装った。あまり心配そうにしていると、柚樹は本心を出そうとしないかもしれない。

どう話を切り出そうかしばらく考えていたら、柚樹が軽く目を擦

った。

「寝てないの？」

四面に時刻表やお知らせが貼ってある標識に、背中を預ける。

「うん」

「どうしてか、聞いてもいい？」

「どうしても何も。冬も近いっていうのに、こんな布切れだけで眠れるわけないよ」

言った後に柚樹は、俯いた。

「寒いなあ」

そしてスカートから覗く太ももの辺りを擦った。

聡美は、着ていたコートを脱ぎ、柚樹の膝もとにかけた。突然肌に触れたものに驚いたのだろう、柚樹は顔を上げた。

「さつき、ゆずの家に行ってきたよ」

「え……」

呆然としたように呟いた柚樹は、聡美がじっと見ていることに気付くと、すぐに取り繕った。

「あ、え、えっと、うちの親、なんか変なこと、言っ、て、なかつた？」

「言っ、てなかつた。何もね。でもきつと、遅くなつて心配してるから、家に帰つたら？」

柚樹が身じろぎした。

「……って言えば、そうなるよね。あの家を見たら、どんな馬鹿でもわかるよ。ケータイを羨ましがってる柚樹が、経済的な理由で買ってもらえないことはないってことくらい。部活と掛け持ちで、校則無視の深夜バイトなんかする必要もない」

そう言ってから、いつも、背の低い乃亜に視点を合わせているように、ベンチに座る柚樹の前にしゃがんだ。そして、コートの上から、柚樹の膝の上に手を置いた。

「やっぱり、私じゃ、頼りないかな。自分では、口が堅いと思ってるんだけど」

「はーやーく」

そこでようやく、こちらのしよつとしていることを呑みこんでくれたようだった。

慌ててコートを着込み、こちらに走ってくる。それは、柚樹が普段、絶対に見せないような子供っぽい仕草だった。

12 言い訳

「お、じゃま、します……」

聡美に連れられて顔を見せたリビングには、柚樹の家族全員が揃っていた。

慣れない空気に気圧されながら、挨拶をした。

「あれ、柚樹さん、どうしたんすか？」

聡美の弟の聡史が、首を傾げた。聡美の家には何度か来たことがある。聡美の父以外とは顔見知りだ。

「先に部屋に行つてて」

聡美の言葉に甘えて、軽く頭を下げてから、リビングを辞した。階段を上がつて聡美の部屋に行く。真っ暗だったので、電気傘からぶら下がる紐を探しあて、電気を点けた。

足元には脱ぎっ放しの洋服、お菓子の空袋、携帯ゲーム機、散乱した漫画があつた。ちょうど、一人人が寝そべることのできる空間だけがぽっかりと空いている。そこに寝転がつて漫画を読んでいる聡美の姿が目に見えようだった。

聡美から借りていたコートを脱いで、ハンガーに掛ける。

「だらしないな……」

脱ぎ散らかされた洋服を畳んで一か所に集め、お菓子の空袋を一か所に集め、ゲーム機を勉強机の上に置き、散乱した漫画を拾い集めて一か所に積み上げた。

そして散乱していた漫画の下に、いくつかの絵の下書きと、メモ書きと、シャープペンシルが落ちていた。絵の一つを手にとると、学校の銀杏並木が鮮やかな筆致で描かれていた。

こんな綺麗な絵を、こんなところに……。踏んだりして皺だらけになったら、どうするんだか。

溜息を吐きつつ、勉強机の上にまとめておこうと思って手に取る。メモ書きのほうも拾い集めていたら、たまたま、一つが目に入って

しまった。慌てて裏返す。

しかしその中に一瞬見えた、『ゆず』という文字が気になった。悪いとは思いつつも、表に向け直した。

『あや……無気力。部活にも行っていない。授業中、ノートを取っている様子もない。いつもどこか遠くを眺めている。対処法不明。』

なお……あれから一度も学校にこない。一番深い傷はたぶん、あやに疑われたこと。あやが家を訪ねて謝れば、少しは復活する可能性。くらもとたちが何かやってきても、四人で対抗すればなんとなる。けど、家庭の事情はどうにもならない。一番慎重に対応が必要。

ゆず……相変わらず、強情。一度も本心を見せてくれない。でも何となく、辛そう。助けてほしいそうにしている。どうにか本心を吐きだしてもらいたい。そうすればどうにかできるかも。

くらもと……バカ やすい……アホ くらた……妖怪猫又『

くつ』

妖怪猫又、で思わず噴き出した。

「何か変な所あった？」

「ね、猫又って……あははっ。ぴったり。確かに倉田の猫かぶりの技術、は、妖怪、並み……」

途中まで笑いながら言っ、慌てて振り向く。メモを見ながら一人で笑っていたはずが、いつの間にか後ろに聡美がいた。手にはご飯、味噌汁、魚の煮付け、コールスローサラダ、カップめんが載せられたおぼん。

「ご、ごめつ、勝手に、見てっ……」

「いいよ、別に、メモくらい。片付けてくれてありがとう」

聡美はお盆をフLOORリング張りの床に直接置いた。勉強机の上は色々なもので雑然としていて、置き場がない。

聡美が座ったので、お盆を挟んだ正面に、柚樹も、座る。

「あ、え……ん？ どういたし、まして？」

「さあ、どうぞ」

「う、うん」

柚樹がカップめんに手を伸ばそうとすると、聡美が先んじてカップめんを取ってしまった。

そのまま視線を上げ、聡美の顔を見つめていると、不思議そうに首を傾げられた。

いちいち、さりげない、よなあ……。

また涙腺が緩みかけ、柚樹は、制服のスカートの裾を思い切り掴んだ。

「あのさ……」

「どうかした？」

「いま、話、聞いてもらっても、いいかな。食べながら、片手間で聞いてくれた方が楽だから」

「いいよ」

「たぶん気持ち悪い話だけど、我慢してね」

ブレザーのポケットから、この間見つけたものを、指で摘んで取り出した。

「これ、何だと思う」

カップめんのスープを啜っていた聡美は、少し目を細めた。

「小型カメラ？」

「当たり前。私の家の風呂場の脱衣室には、洗面台があって、鏡が開閉して、裏側に物が収納できるようになってる。その鏡がたまに、少しだけ開いてることがあって。私は使わせてもらえない場所だから気にしてなかったんだけど。気まぐれで閉めようとしたら、中にこれがあった。中の映像を確かめてみたら、私の着替えの様子だけが、映ってた」

少し間を開けると、ずるずると、めんを啜る音だけがした。

「たぶん、盗撮。で、親が弟の塾の送り迎えしてる間に、少しずつ弟のパソコンをチェックしていったら、どうやって撮ったのか、部屋の着替え、トイレの映像もあった。売ってたんだよ。あいつは。掲示板とかで適当に見繕った奴に、メールで。ただの着替えは三百

円、風呂場のは五百円、トイレのは千円、ってね」

自嘲の笑いが零れる。

客観的に見れば、家族の恥、なのだろう。けれどそんな感慨はどこにもなかった。

カメラを少し眺めてから、ブレザーのポケットに戻した。

「なんかもう、弟のイカレ具合とか、家の中のごちゃごちゃしたことに、うんざりしてて。どうすればいいのか途方に暮れてたら、そこでちょうど、綾が……自殺未遂、して。私、弟が優秀なせいで劣等感、酷いからさ、綾に対しても当然、持ってた。劣等感の塊みたいなもの。だから、急に、恥ずかしくなってきた。なんで綾みたいなのが自殺未遂して、自分が生きてるんだろうって……。自殺未遂なんかされたら、ゴミみたいな私が生きてるのなんて、馬鹿らしいでしょ。それにさあ、それに……」

スカートの裾をさらに強く、握り締めた。

「蔵本が怖かった。あいつ、私に、言うんだよ。四人の中で、一番言うこと聞きそうな私を捕まえて。あいつを無視したらお前には手を出さないって。澤山に見てるよう頼んだから、余計なことしないでね、って。」

あいつ、矢崎に……。矢崎の腕にいつぱいあたりスカの傷、矢崎がやってたんじゃないんだよ。あいつがやってたんだよ。矢崎が泣き叫んでるの押さえつけて、ちゃんと大きい血管は避けて、傷の深さや方向まで計算してるみたいな口ぶりで、安井や倉田と話してた。矢崎、矢崎はさあ、自分でつけたわけでもない傷を隠して、隠しきれなくて、おかしくなんてないのに、家族にも、友達にも、そんな傷があるのはおかしいおかしいって言われて、本当におかしくなっていたんだよ。私はそれを見てた。見てたのに何もなかった。蔵本が、怖かったから！」

それなのに。

「それなのに、直は、立ち向かうんだよ。あいつに。それで、私を嘲けるような目を向けてきた」

直の視線に射られる度、心臓が早鐘を打った。

……私だつて綾の事、助けたい。助けたいけど、怖い。

言い訳ばかりが渦巻いた。

「結局、直は、蔵本に勝てなかった。でも、戦わなかった私より、良い。家の中では、居ても居なくても同じみたいな存在で、学校でも、友達を助けようとしてもしないで、臆病な自己保身しか考えてない。自分の馬鹿さ加減に気付かないふりをしてたけど、もう限界だった」
カップめんの容器を聡美が、床に置いた。中身は空になっていた。
「そんな時に、聡美が……。聡美が、優しく、してくれる、から。涙なんか、馬鹿みたいに……」

今まで、他人からの優しさは、沼のようだと思ってきた。優しくされると、底に沈んだ泥と水草に、感情が絡め取られそうになる。けれどその沼は、透明で澄んでいて、よく目を凝らすと、ひどく浅い。絡め取られても、すぐに落ち着きを取り戻せる。

聡美の場合は、水深は同じはずなのに、水が濁って泥の層が厚く、底が見えなかった。一度足を取られたら、どこまでも引きずり込まれ、感情が自分の意志とは関係なしに絡め取られてしまうような気さえしていた。吐き出さないように、必死に溜め込んできた感情までもが。だから、怖かった。

しかし聡美の優しさは、沼ではなかった。足を取られてパニックになっているこちらへ向かって、「慌てないで」と叫び続け、沼の縁から、必死に手を差し出してくれていた。

溺れかけている時になってようやく気付くことのできた、その手。思わず掴んでしまった。

また、嗚咽が零れ出す。嫌だ、子供みたいだ、我慢しないと。そう思ったって、止まらない。自然に出てしまう。

「言い訳はそれで終わり？」

言い訳、と断じられたことに、どきりとする。

「ゆずは、私を介して、蔵本に脅されてることを綾に伝えるべきだ

ったんだよ。ゆずなら、そのくらいの頭は回るはず。それもやめて全思考停止っていうのは……ちょっと、共感できないな」

聡美の言い回しが少きつめだったので、涙腺が余計に緩んだ。

「共感はできないけど、ね。ゆずのそういう弱さ、聞かせてもらえて良かったなあ、と思った。今、すごく、嬉しいよ。ゆずが、初めて私を、頼ってくれたから」

目を擦っても擦っても涙が溢れて、霞んでしまう視界の中、聡美が笑った。

「復活したら、いろいろやってもらわないとね。私一人じゃちょっと、大変だし」

でも今は、と聡美が呟く。

「ゆっくり、休んで」

13 ひとつの布団

今はもう絶滅しかけた公衆電話ボックスの中で、柚樹は戦っていた。明け放たれたボックスのドアを押さえながら、聡美はその後ろ姿を見据える。

「とっ……友達の家には……ばらく、泊まる、から。そ、それだけっ！」

柚樹はどもりながらも、言い切り、受話器を乱暴に置いた。

柚樹の自宅の電話機にはナンバーディスプレイ機能があるということなので、聡美の家に迷惑をかけたくない、自分で公衆電話を探してきた。しかし一人で電話を掛ける勇気はないので、怖気づかないようについて来てほしいと言われ、今こうしている。

「頑張ったね」

「ありがとう」

覇気のない柚樹の顔は、血色が非常に悪かった。それだけでも柚樹の置かれている状況が垣間見える気がした。よほど険悪な仲でなければ、母親と話すだけでこんな疲れきった顔は見せない。

昨日の柚樹は結局そのまま、聡美の家に泊まった。汚い部屋を一緒に片付けて、ひとつしかない布団で一緒に寝た。仰向けで寝ようとしていて、遠慮がちに体を寄せてきた柚樹に左腕を抱きしめられた時は、女同士とはいえさすがに焦ったけれど、柚樹は人肌で温まって安心したかったらしく、そのまま何もせず眠りに落ちた。そんな風に甘えられても、身長差が二十もあつては、こちらが子供みたいだった。

「帰ろっかー」

聡史がことあるごとに話題を振ったり、乃亜が遊べ遊べとまとわりついたりしているが、柚樹は意外にも、嬉しそうに顔を綻ばせて受け答えをしている。たぶん柚樹は、家族という存在に飢えている。柚樹の家に行った昨日、柚樹の母に電話番号を渡してしまったか

ら、折り返しかかってくるのも時間の問題だ。だけどこちらには、柚樹の弟が盗撮して小銭を稼いでいたという事実がある。これを上手く使えばしばらくは、柚樹の事を、あの家から遠ざけることが出来る。

しかしあくまで、しばらくは、だ。家族との関係を修復しようにも、相手にその意思がないのだから、柚樹の置かれている立場は変わらない。

「明日、おばあちゃんの家に行こうと思う」

聡史に借りた男物の服を着ている柚樹が呟き、聡美は考えていたことをとりあえず脇によけた。聡史の服を着ていることに特に意味はなく、聡美のものは小さくてサイズが合わないだけだった。

「おばあちゃんは息子夫婦……私から見て叔父夫婦と住んでるから、迷惑かもしれない迷惑かもしれないって、そればかり考えてて、何も相談してなかったんだけど……。私がね、人並みに生活できるのは、おばあちゃんからお金を貰ってるおかげなの」

「いいおばあちゃんだね」

柚樹がはにかんで、笑う。

「うん……。とっても、優しい人。だから、相談だけでもしてみる。私の両親は、おばあちゃんと叔父夫婦のことをいつも馬鹿にして、悪口ばかり言ってるから、親権が弁護士がつて持ち出して、簡単にいかなそうだけど」

「やってみる価値はあると思う」

「そうするつもり」

「でも、ゆずって、おばあちゃん、なんだ。うちの祖母が、とか言いそうなのに」

「おばあちゃんは、おばあちゃんだし……」

少し不機嫌な様子で、柚樹が呟く。

「怒るなってー。かわいいところもあるって意味だよ」

肩を、柚樹の腕にぶつける。

「いたっ」

更に不機嫌な呻きが聞こえたが、体のつくりの違いのせいであるのはこちらだった。柚樹が手首を掴んでくれたので、転ぶことはなく、どうにか踏みとどまれた。

「少しは運動したら？　ただでさえ色白で、モヤシに見えるんだから」

柚樹は手を離し、呆れを隠そうともせずと言った。

……久しぶりだね、その表情。

口には出さずに、そう思った。べたべた甘えてくる柚樹も可愛いけど、やっぱり柚樹はこうじゃないと。

自宅へ戻り、夕方になると、弟の聡史が部活から帰ってきた。一階の居間で、母の料理する音を聞きながら、柚樹と一緒に神経衰弱をやっていた聡美は、場所を取るそれを片付けた。なぜかトランプ全般は得意なので、綾に似て、負けることが大嫌いの柚樹には、フラストレーションを与えただけだったかもしれない。

付け加えておくと、今日は土曜日なので、無断欠席ではない。高校に入学してから、遅刻や欠席は一度もなかったりする。だから英語の先生にも、あれほどひどい成績を取ることを不思議がられるんだけど。

「今日、仕事組は遅いらしいから。ごはん早くする」

母がテーブルを拭きながら、声をかけてきた。

「やった。お腹空いたー」

「何か手伝いましょうか？」

柚樹の提案に対し、母は首を横に振った。そのまま、台所に引っ込んだ。

「ごめん、うちの親、料理が趣味だから。手伝おうとすると、邪魔の一言で片づけられる」

「なんだか……変わってるね。聡美のお母さん」

「今さら気付いたの？」

聡美が答えると、母がさっそく食卓に料理を並べ始めた。聡美が父親の席に座り、柚樹は聡美の席に座った。聡史も席について、柚

樹は、まだお邪魔してます、と軽く頭を下げた。

「気にしないでくださいよ。人数が多い方が楽しいし」

「ありがとう、聡史くん」

「いえ」

聡史は少し照れくさそうに笑った。

箸やご飯、野菜スープ、大根ときゅうりとわかめのサラダ、といった品を先に並べていた母は、今日のメインのおかずを台所から運んできた。

それはハンバーグだった。まだ暖房は入れていないが、それなりに寒いなかで、勢いよく湯気が立ち上っている。

「うわあ〜」

とても無邪気に喜ぶ声が聞こえた。空腹をこじらせた聡史が裏声でも使ったのかと思つて一瞥したが、聡史は、柚樹の方を見ている。

「今の、ゆず？」

訝りながら口にしてみると、柚樹の顔がみるみるうちに赤くなつていった。

「わ、悪い？ おいしそうなものに素直に反応しただけだよ」

「ゆず、昨日から隙が多くて、可愛い」

聡美は、笑みを浮かべた。なかなか普段の無愛想な柚樹のイメージと合致しない行動が多いけれど、それがいちいち楽しい。

柚樹は聡美のからかいにはそれ以上応じず、赤い顔のまま、ハンバーグを一心に見つめている。

「あ、そういえば」

と、聡史が言つたので、そちらに首を向けた。

「聡美ごめん、来週土曜の映画、マネージャーの勘違いとかで急に練習が入って、無理になった」

「あー、薄々そんな気はしてた。休みなんてないもんね」

「申し訳ないっす」

「いいよ、もう、大丈夫。映画なんて見たくもないのに……… 氣い遣つてくれて、ありがとう。お姉ちゃん、もうちょつと頑張ってみる」

わざとらしく握り拳を作って見せると、聡史がくすりと笑った。
「お姉ちゃん、頑張ってみる、か。懐かしーな」。鉄棒で逆上がり
ができない時も、自転車を上手く乗りこなせないときも、掛け算九
九が覚えられない時も、いっつも言ってたよな」

夕食を食べ、乃亜の相手をしたり交代でお風呂に入ったり歯を磨
いたりしたあと、柚樹と二人で部屋に戻った。

夜十時を過ぎた所で電気を消し、それからまた、ひとつの布団へ
一緒に入った。

「昨日は、ごめん。気持ち悪いことして」

聡美と反対方向の左側に体を向けている柚樹が、ぽつりと、呟い
た。

「ううん。全然予想してなかったから、ちょっと焦ったけど、気持
ち悪くはないよ。私も暖かかったし」

「寝る前は、いっつも、余計なことばかり考える。昨日は、ここ
がばれて、すぐに連れ戻されるんじゃないか、聡美の家に迷惑かけ
るんじゃないか、って思ってたら、怖くてしょうがなかった」

はあ、と柚樹が溜息を吐いた。

「今は、昨日、なんであんなことしたんだろうって、自己嫌悪。聡
美に甘えすぎてて、自分でも気持ち悪い」

聡美は寝返りを打って柚樹のほうに向き直り、

「腕まくらー」

とふざけて言いながら、柚樹の首と布団の間に、右手を突っ込
んだ。

「うあっ」

柚樹がまたも意外な、可愛い悲鳴を上げた。

ついでに左手も首もとに回し、柚樹を背後から抱きしめる格好に
してみた。柚樹の髪からシャンプーの香りが漂ってくる。

「女子校に友達以上恋人未満の過剰なスキンシップはつきものだぜ
ー柚樹さんよあ」

「誰からの情報よ、それ！」

叫ぶようにして言った柚樹が、首を縮めて固まったまま動かないので、こちらから離れた。そこまで緊張されると、もっと悪戯したくなるけど。

「私には乃亜がいるから、甘えられるのは慣れてるし、結構、好き。そのくらいで自己嫌悪なんてしないでいいよ」

柚樹は今まで、誰にも頼らないで……いや、誰にも頼れないで、生きてきたのだろう。

毎日、そんなに楽しい空間は共有していなくても、顔を突き合わせているだけで、ちよつと安心する。家族がいつぱいいて、そんな空気に慣れ親しんできた自分だからこそ、分かる。家族という存在の大きさが。家族という存在の包容力が。それらが全くなく、むしろ嵩^{かさ}にかかって柚樹の存在を否定してくるのなら、それは、とても……。とても、耐えがたいことだ。

柚樹に聞いた話からは、柚樹が、家で笑っている様子が全く想像できない。映像として浮かんでこない。家での圧迫が、四六時中、気を張り詰めているような、硬い表情を強いているのだとしたら。ここで寝泊まりして知った柚樹の側面を、意外だなあ意外だなあと思つて、そんな目で見ていられるけれど、本当は、驚くようなことではないのかもしれない。

「それでもやつぱり、甘えてばかりは、やだよ。私も、私なりにできることから、やっていくから。聡美も、何かあったら、私に、相談して」

柚樹が反対側を向いたまま、そう零した。

……やばい。嬉しい。

聡美は照れ隠しに、目の前にある柚樹の背中に、頭突きをした。

柚樹は小さく呻いてから、振り向きもせず、肘でこちらの脇腹を突いてきた。

手加減されてはいるのだろうが、もろに入った。

「いったあ……」

柚樹と同じように呻きつつ、鈍く広がる痛み、軽く体を丸めた。けど、なぜだか、楽しくてしょうがなかった。柚樹の背に額を預けたまま、笑みを浮かべたまま、目を閉じた。

14 厚焼き玉子

目が覚めると夜だった。デジタル時計が薄い光を放ち、そこにはAM1:19と表示されていた。

寝たのは正午過ぎだったから、十三時間くらい眠ったことになるのだろうか。全身が気だるく、口の中に不快な粘つきがある。枕から顔を上げ、ベッドに手を突き、ゆっくりと毛布から這い出した。

部屋を出て、洗面台に向かう。寝静まった家で、フローリングを踏みしめる微かな音だけが鳴る。

電気をつけて、鏡に映ったのは生氣のない目。風呂にしばらく入っていないので、べたついて荒れ放題の髪の毛はいつもの通り。髪を切りに行く基準にしている長さより、ずいぶんと伸びた。前髪も目の半分辺りまで垂れてきた。

口を濯ぎ、顔を軽く洗った。

立っているのも疲れるくらいの全身の気だるさの原因を考えながら、タオルで顔全体を拭く。

拭き終えた所で、そういえば四日くらい水しか飲んでいないなと思ひ至り、台所に向かった。

廊下を歩くと、何やらぶつぶつと呟きながら、玄関のドアを押し開けようともがいている祖母がいた。徘徊対策で、玄関の扉は内側からもキーを使わないと開けられないようになっている。

冷蔵庫にはジャムしか入っていないかった。冷凍室には氷も入っていない。野菜室にはしなびたキャベツが一玉あるだけ。お菓子が入っている所にも何も無い。レトルト食品も一切ない。カップ麺もない。

それらを探ただけで、ひどく疲れた。体が上手く言うことをきかなかった。

仕方がないので、水道から落ちてくる水を直接飲んで胃に落とし込み、また部屋に戻って寝た。

なくなっていたバツシュが、戻ってきた。芝原が言うには、柚樹が、隠していたそうだ。

朝の教室。人の往来の激しい出入り口。違うクラスの芝原に大きな声で名前を呼ばれ続け、無視するわけにもいかず、対応した。

「青野の奴。見損なった。澤山みたいなクズは分かるけど、あいつだけはしれないと思ってたのに。道具をこんな風に扱うなんて」

乱暴にバツシュを押し付けてきた芝原は、まだ怒りの収まらない様子で、柚樹に対する悪態を吐いていた。

一緒に買いに行ったのに。このバツシュを使っている半年の間も、ずっと一緒に、頑張ってきたのに。……. よりにもよって、柚樹だったのか。

思い入れのあるバツシュが戻ってきて、嬉しくもなんともなかった。

「そつえば」

気を取り直したように、芝原が言う。目だけで応える。

「男子のほう、この間、初めて対外試合で勝ったよ」

そうなんだ。おめでとう、ずっと勝ちたがってたもんね……. そんな言葉を口から吐き出す元気はなかった。

「バツシュ戻ったから、部活、また来るようになる？ 男子のほうはいつでも歓迎だけど」

考えることなく、首を横に振った。バツシュがなくなったのは、きつかけに過ぎない。このまま辞めてしまおうと、最近ずっと、考えていた。行くのが苦痛で苦痛で仕方なかった。今ここに立ってい

るだけで安定剤をかき込みたくなるのに、そんなことはできるはずもない。

「そっか」

芝原は少し寂しそうに言った。けれどすぐに笑顔になった。

「部活はやめてもしようがないけど……。絶対、バスケは辞めないでな。俺の目標、いつまで経っても、飯原だから。今これだけ苦労してるんだから、大学では良い仲間恵まれるよ、きっと」

「ありがとう」

綾はそう言ったきり芝原を見ず、左側の列の真ん中にある座席へ戻った。

席に着いてから、何気なく、教室の前方の出入り口を見遣る。教師がホームルームのために入ってくるからだ。けれど視界に蔵本が入り、そちらに気を取られた。蔵本が気付いて、小さく口元を緩めた。白い陶磁器のようなその儚い横顔は、病的なまでに美しく、何を考えているのか全く読み取らせてはくれなかった。

ほどなく教室に入ってきた教師によって行われた出欠確認では、柚樹と直だけが欠席となっていた。少しほっとした。柚樹が来ていたら、一日中、気分が塞いだままだったろうから。

ここ最近では、昼休みを一人で過ごすのが慣例となっていた。しかしそれを破って、聡美が、目の前の席に座ってきた。綾の机に向き直った聡美は、機嫌の良さそうな手つきで弁当箱を広げ、食べ始めた。

直が学校に来なくなっただけから、聡美だけは話しかけていたが、あまりうまく対応できないでいると、徐々に話しかけなくなってきた。直より蔵本のほうを信用した、あの馬鹿な行動を、聡美だって、内心では責めているんだろう。軽蔑しているんだろう。そんな当てつけがましい偏見でもって聡美を見てきた。

あの日、直が語ったことは、気持ちの整理がつきつつある今では、本当だと思う。蔵本たちなら、直になりすますくらいのことを暇潰

しにやりかねない。だがあの時は違った。直のことを、心の底から疑った。余裕がなかった。教室を飛び出した直を追いかけることもせず、ホームルームが終わったすぐ後、家に帰った。家中ひっかきまわして母の隠した安定剤と睡眠薬を探しあて、指定された量よりも多めに飲んで、眠りの世界に逃げ込んだ。起きると、夜勤が早めに終わったらしい母が、リビングで噉り泣いていた。学校では、直が来なかった。

「綾」

いつもの後悔が渦巻き始めたところで、聡美が呟くように言った。つた。

芝原に対してと同じように、目だけで応える。

「厚焼き玉子、食べる？ 私の手作り」

箸で厚焼き玉子を指した聡美が、軽く首を傾けている。今朝は弁当を用意する気力がなく、ちようどお腹がきゆるきゆると小さく鳴っていた所だったので、すぐに断れなかった。聡美が箸の持ち手側を押し付けてきた。

受け取り、うまく形の整えられた厚焼き玉子に、箸をつけた。

咀嚼すると、穏やかな甘みが口の中に広がっていた。どこか抜けている聡美だから、何かオチがあるのかと思ったが、見た目のままの味だった。

「どう？」

頬杖をついた聡美が、やや上目遣いに訊いてきた。その目には、微塵も、軽蔑の色は感じられない。

「おいしい」

少しだけ、声が震えた。

随分と久しぶりに、聡美と会話が出来た。

「おいしいよ、聡美」

なぜだか喉奥から沸き上がってくるものがあつた。どうにか堪え、聡美に箸を返した。

「それはよかった。……これで綾は私に対して一飯の恩ができた、

と」

聡美は箸を持ち直した。

……一飯の恩にしては量が少ないんだけど。

久しぶりに、掛け合いじみた言葉が思い浮かんだが、声が上手く出なかった。

「恩返しの方法はひとつだけ。これから言うこと、黙って聞いて」

15 僕

柚樹は、綾の事を嫌っていたわけではない。蔵本たちが怖かっただけだった。

聡美の話は、まとめるとそういうことだった。柚樹には、辛い時に散々無視されて、皮肉まで吐かれた。普通だったら、信じることはできなかっただろう。お前は柚樹の味方なのか、となじっていたかもしれない。けれど、聡美が相手だった。こちらが、殴りつきたいのを堪えながら乃亜の相手をして、『遊んであげてくれて、ありがとう』と微笑む女が。

直以外の事は大して信用していないつもりでいた自分が、直を疑ってにおいて、聡美を疑わないなんて、気の利いた皮肉だけど。

聡美が直の復帰のために動くことを聞かされ、久しぶりに現実に引き戻されたような、そんな気がした。今日、退部届を職員室に受け取りに行こうとしていたが、やめて、ひとまず帰路についた。

自分の立場をはっきりさせることよりもまず、直にしたことを自覚して、もう一度、考え直さなければならぬ。銀杏の並木坂を自転車で駆け下りながら、妙に頭が冴え冴えとしていくのを感じていた。

小学五年の夏休み明け、綾の通う小学校に転校してきた直の第一印象は、姿勢がいい子だなあ、だった。身長はそこらへんの男子よりも高く、あいさつした後で席に着くまでの動作が綺麗で、やけに

鮮明に記憶に残っている。

ただ、それだけだった。遊び友達には困っていなかったし、転校生を仲間に入れてあげよう、そんな殊勝なことを考えられるほど大人じゃなかった。小学生なりにほとんど遊び相手が固定化されていて、そこに割り込むには、それなりの積極性が必要だった。だから直は、いつも一人でいた。あの子、誰とも話そうとしないで暗いよね、なんて友達と言いつたりもした。

当時の自分には、何があっても友達に知られたくない事実があった。それは父親の存在だった。父は違法マツサージ店の経営で所帯を持つ程度の財をなした人間だった。警察に目を付けられないよう、素行には常に気を配り、いつもスーツにネクタイを締めて歩いていた。歓楽街のすぐそばに借家を借り、そこを通らないと仕事に行けないで困りますよ、なんてご近所さんには愚痴っていた。今思えばそれは、案外小心者だった父の、気休めに過ぎない行為だったが、本人はそれで安心していった。母と所帯を持ったのは、そんな気休めの一環だった。

酒が入ると必ず母と綾に手を上げ、時間が空けば家に香水くさい女を連れ込み、近所の目を気にして、猿轡を嚙ませてセックスするような男だった。母と綾が家にいるにもかかわらず、だ。自分は父の、獣のような激しい息遣いと、ベッドの軋む音を毎日聞いて育った。父と獣の交わりをする女たちが、決まって勝ち誇ったような目で母を見て行くのが、不快でしうがなかった。

父親は、五年生になった時初めて、自分が経営する店に、綾を連れていった。なんでも従業員の人件費を削減するためとかで、学校が終わったら毎日、店番をやれということだった。システムが割と複雑だったので、間違えたら顔以外を殴られ、間違えたら顔以外を殴られているうちに、やり方を覚えていった。最初は下校後直接店に行き、ランドセルをカウンターの内側に突っ込んで、女の格好のまま店番をしていたが、一人の客を案内している際、無理矢理抱き締められて、首筋に舌を這わせられたことがあった。幸い、表

向きはマツサージ師の女が、案内が遅いのを不審に思っ出て迎えに来たので、そこで終わった。父は外に漏れないよう、会員制で客を取っていたが、そいつは初見だった。次の日から綾は、男物の服装に着替えて店番をした。

綾は、店に在る間、息子として振舞うようになった。キャップを目深にかぶり、胸が目立たないような服を着た。客と会話に迫られた時は、いかにも声変り前の男子といったふりをして、応対をしていた。長かった髪も、ばつさりと切り落とした。気付いたら、母の前でも、友達のの前でも、無意識に「僕」という一人称を使うようになった。そのことを友達は不思議がったが、すぐに慣れたように、あまり言及はされなかった。十一歳の「僕」にとって、性行為は父への嫌悪と直結していた。絶対に避けなければならぬものだった。客に襲われかけたことが、本当に怖かった。母を苦しめる父と、父と交わる女たちと同じになつてしまふような気がして、怖かった。けれど、「僕」で在るなら、客に襲われるような心配はなかった。

転機は、直に、店から出てくる所を見られたことだった。

その日は夜九時まで店番をして、男の恰好のまま、風俗店が軒を連ねる裏通りを歩いてた。すると、向こうから、誰かが歩いてきた。路地は暗く、叫んでも誰も助けが来ないような立地だった。だが、その時の自分にとって、「僕」で在るということは、苦しいこと、嫌悪して在ることに触れる可能性を排除してくれる魔法の暗示だったので、さほど警戒はしなかった。

自分より頭一つ分くらい、背の高い女の人だった。足早に歩いてきた彼女に、

「飯原さん！ この辺で、うろろろして在るおばあさん見かけなかった？」

と聞かれた。女の方は、汗を顔いっぱいにかいて、肩で息をしてた。よく見ると直だった。直の身長伸びは小学生の時に止まつたから、今では同じくらいの身長になつたけれど、あの頃は直の方

が頭ひとつ分、高かった。

その時の衝撃は、今でも忘れない。

男の恰好をして、ポケットに手をつ突っ込んで、目深にキャップを被って、俯いて歩いていたのに、直は、一発で綾を、見抜いたのだ。

「僕」が「女」であると、一目で。

しばらく返事が出来なかった。綾が何も言わないでいると、

「ごめん、見てないよね。ありがとう」

と言って、走り出した。直が路地を曲がるのを見送ったところで、体中から嫌な汗が噴き出しているのに気付いた。

家に帰り、明るい所でちゃんと自分の服を見ると、襟の辺りに大きな汗染みが出来ていた。夏の残り香は、昼にはあったが、夜にはなかった。過ごしやすい陽気が続いていた。

次の日から綾は、直に話しかけるようになった。自分が、夜の歓楽街を、男の恰好で出歩いていたことを、直が面白がつてみんなに言いふらす。そのことを想像しただけで、生きた心地がしなかった。どうせ、あんな父親から生まれた自分は、ろくな人生を歩めない。

だからせめて学校にいる間だけは、みんなと仲良く、束の間の夢を見ていたかった。そのためには、絶対に誰にも、父のことを知られてはならなかった。父の職業が分かる糸口すら、知られてはならなかった。

しかし直は、綾にとっては絶対的な自己暗示だった「僕」のことを見破った。たったそれだけの根拠だけだったが、綾の父があの辺りで働いていることを、直は既に見破っているかもしれない、という恐怖心が、とめどなく溢れた。

だから、直に友達が出来て、言いふらされる前に取り入ろうとした。急に直へ話しかけるようになった綾を、友達は、不思議がったけれど、「僕」と言い始めた時のように、時間が経てばすぐに慣れていた。

そんな始まりだったにもかかわらず、綾は、周囲にはない知識や落ち着きをもつ直と居ると楽しく、直と話しているだけで、父の手

伝いの疲れが体から抜けていくようになっていった。それでも毎日が不安で仕方ないことには、変わりなかった。口約束が守られる、なんて無邪気に信じてはいなかったけれど、どうしても目に見える約束が欲しかった。

ついに我慢しきれず、ある時、自分から、直に口止めした。

「あの、さ……お願いがあるんだけど」

給食の片づけが終わった昼休み、みんなが外に遊びに行った教室で、直へ話しかけた。

そう切り出すと、一人で学級文庫を読んでいた直は、目だけでこちらを見た。

「前に、夜、会ったこと、覚えてる？」

「覚えてるけど」

「お願い。僕をあそこで見たこと、誰にも言わないで」

頭を、下げた。直の小さな笑い声が、耳朶をくすぐった。

「顔、上げてよ」

言われたとおりにすると、直は、寂しそうに笑っていた。

「言わない。どんな事情があるのか知らないけど、そんなこと、しない」

直は本を閉じた。

「変だと思った。飯原さんみたいなのが、仲良くしてくれるなんて。そういえば、あそこで会った次の日からだね。話しかけてくれたの」
綾は、少し迷ってから、頷いた。

「そつかあ……。そんなことを頼むために、我慢して……。私なんかとても楽しくなかったよね」

「あ、えと……」

「ごめん。飯原さんと居るのが楽しくなってきたから、なんだかいま、すつごく嫌な気分なんだ。早くみんなと一緒に遊んできたなら？」

直は頬杖について、教室の外に、睨むような視線をやった。グラウンドでは、ひとつひとつのはしゃぎ声が大きな塊になって騒音と化していた。ドッジボールや大縄大会の練習などが行われていた。

言わなければよかった。言わなければ直は、ずっと黙っていてくれたんだ。でも今は、疑われた腹いせに、みんなに言うかもしれない。直は最近になって、綾以外の喋り相手もできていた。心臓の鼓動が、「僕」を見破られた時のように、激しくなっていた。学校では、みんなと仲良くしていなければならなかった。友達とうまくいかないことに慣れていなかった。

中学に上がったら客を取れ、と父に言われたことを思い出した。新しい奴雇うのにもリスクあるし、と、煙草をふかしながら父は言った。やっぱり自分はまともな人間にはなれそうにもない。だから、せめて学校では……学校にいる間だけは、みんなと、仲良く。ぐるぐる天地が回り出した。気持ち悪かった。

16 衝動

気付いたら、硬いベッドに背中を預けていた。

右向きに寝ていて、目を開けるとすぐ近くに、薬品の棚があった。

「初めての子だねえ、今日はどうして倒れちゃったの？」

体を起して左を向くと、だいぶ年のいった女の養護教諭が、事務机に向かって何か仕事をしながら、のんびりとした口調で尋ねてきた。

「僕、自分でここに来たんですか？」

自分でもなぜ倒れたのか分からなかったので、養護教諭の問いには答えなかった。その時は、過労やストレスで倒れることもある、ということを知らなかった。倒れるのは体の弱い人だけだと思っていた。

「まさか。日焼けしてて背の高い、ピシッとした子がね、汗ダッラダラ流しながら抱えてきてくれたんだよ。しばらくは心配そうに声をかけたり、諦めてからは、眺めてたりしてたけどね。五時間目のチャイムが鳴ったから、教室に帰らせたよ」

綾は、その場面を想像した。

話している最中に突然、倒れられて、直はどうしようかと途方に暮れた。それから、読みさしの本を机の中へ片付け、自分とそう体重の変わらない綾のことを運ぼうと考えた。実際に抱きあげてみると予想以上に重くて、直は、昼休みの人気のない校舎をひとり、息を切らして歩く。涼しく過ぎやすい気温のなかで、汗を流しながら、それでもどうにか綾を、保健室に送り届けた。そしてしばらくの間「飯原さん、大丈夫？」などと声をかけて、返事がないと分かっただけ、傍にいてくれた。

全部、想像だ。想像だけ……。

なんだか、居ても立っても居られない気持ちになった。

「で、原因に心当たりは？」

「わかりません」

応えて、ベッドを、保健室を、素早く抜け出した。

……早く阪井さんにお礼を言わないと。阪井さんが、僕の知られたくないことを言いふらすなんて疑ったことを、謝らないと。

教室に戻ると、みんなは帰り支度をしていた。教室に備え付けられた時計を見ると、四時を過ぎていた。

「綾、大丈夫だったの？」

「阪井さんに何かされたの？」

普段いつも一緒に下校している友達四人が、待っていてくれた。

「ううん。阪井さんは、保健室に連れてってくれただけ。ちよつと貧血。大したことないよ」

「じゃあ、一緒に帰ろー」

「あ、ごめん、今日は、用事があって」

綾は慌てて断った。

「そうなんだ、じゃあ、また明日ね」

寂しそうに言った子に平謝りしながら、赤いランドセルだけを机から取り、昇降口まで全速力で走った。

下駄箱周辺には既に直の姿はなかった。六時間目の授業があった五、六年生の群れを掻き分け、上履きのまま外に駆け出た。すると校門の辺りに、直の後ろ姿を見つけた。背の高さのおかげで目立つ。

「阪井さん！」

自分の中にこんなに大きな声を出せる力があつたのかと思うほど、大きな声が出た。おかげで、言い終えた後すぐ、ひどく喉が痛み、何度か咳き込む羽目になった。直だけでなく、下校途中の人たちが一斉にこちらを振り仰いだので、さすがに恥ずかしくなり、近くにあつた掲示板に体を向け、その視線を避けた。

とん、と一度だけ肩を叩かれた。

「何？」

振り向くと、直は不機嫌そうに言った。

「あ、あの。さっきは疑ったりしてごめん。保健室に連れてってく

れて、ありがとう」

綾はそう言って、頭を下げ、上げた。それから何を言うでもなく、直の反応を待ち、目を合わせていた。

「……それだけ？」

頷いた。直は溜息を吐いた。

「……何か悪いことを言っただろうか。」

そう思っていると、直が、右手を綾の顔の近くに持ってきた。中指が親指に引っ掛けられている。これは、と思っただけ、額は中指によって弾かれていた。

「い、痛いんだけど、阪井さん」

綾は額を両手で抑えながら、不満を零した。

「そのくらいのこと、あんな悲鳴みたいな大声出さないで。明日言えればいいでしょ。何かもつと大変なことが起こったのかと思った……」

「で、でも、僕にとっては大変なこと……。疑ったことを、すぐに謝りたくて」

直はそこでまた、寂しそうに笑った。

「そんなに心配しなくても、大丈夫。疑われた腹いせに言いふらしたりとかもするつもりないし」

「うん。確かに僕、最初は、阪井さんが言いふらさないか、確認するつもりで話しかけた。でも、でもね、だんだん、阪井さんという安心できるようになってきたのも本当で……。さっき、保健室に送り届けてくれたんですよ。息を切らしながら、汗だつていっぱい、かきながら。保健室の先生にそれ聞いて、すぐ、謝らないとつて」

「そんなに必死に運んでない。保健室の先生が大げさなんだよ」

「運んでくれたのは本当でしょ。僕だったら、あんな、疑うようなこと言われたすぐ後に、大変な思いして、運んだり、できないから。阪井さん、本当にすごいなあ……。この人ともつと一緒にいるんなことしてみたいなあって、思った」

それができるのは、きつと、あと一年半くらいだけれど。

直の、日に焼けた顔が少しだけ、色を濃くしたような気がした。

「恥ずかしいこと、平然と言うね。いつもそうなの？」

「僕も、こんなこと言えたのは、直が初めて」

さりげなく、呼び捨てにしてみると、

「なんかそれ、口説き文句みたいだよ、綾」

直も同じように、呼び捨てで返してきた。

お互いになんともなく顔を見合わせて、笑った。

一番の友達は直になった。まともな生活を送れるはずの最後の年も、同じクラスになれて、楽しいことをたくさん、分かち合った。

これでもう満足だ、後は父の言い成りになって働こう。小学校の卒業式を終え、そう覚悟して家へと帰ると、両親がいなかった。それまでも不在の頻度が増えていたから、綾は、黙って母の帰りを待った。

後から母に聞いた話だと、母は、家庭裁判所にいたらしい。綾の知らないうちに、父は、家庭内暴力の証拠を溜めこんでいた母によって、離婚調停へ持ち込まれていた。母は慰謝料の請求をせず、綾の親権だけを主張した。条件的には悪くなかったからか、既に次の女への目星をつけていたからか、あるいはその両方か。初めは渋っていた父も、最終的には離婚に同意したそうだ。

そして小学校の卒業式の日、ちょうど調停調書が作成され、離婚が成立した日だった。結果を父より早く知った母は、事情の呑み込めないでいる綾を連れてすぐ家を出て、最寄駅に向かった。

綾と母は新しい街に引っ越した。直の一家がまた、三月に入ってから引っ越していたので、そのことは母に伏せつつ、直から教えてもらった住所の近くへの転居を希望した。通えるのなら、同じ中学に通いたかった。

その後、離婚調停の聞き取り調査の過程で出た話を、事件性ありと判断した調査官が、警察へ届け出た。そこから違法マッサージ店

の複数経営が明らかになって、父は逮捕されたと聞いた。父は家庭裁判所だけでなく、地方裁判所へも足を運ぶこととなり、そこで父には執行猶予なしの実刑、懲役二年の判決が出た。父は控訴したが、高等裁判所でも結果は変わらなかった。父はもう、控訴しなかった。

以降の父の消息は、知らない。

けれど、今年になって襲われるようになった自殺衝動には、父が絡んでいた。

中学三年の、冬ごろ。逆恨みから娘と妻を殺した男が世間で騒がれたのをきっかけに、それまでほとんど忘れかけていた父の事を、突然、思い出した。

それからだった。計算上は二年の刑期を終えたはずの父に、母と綾が警察に情報提供したと思いこんでいるはずの父に、今の借家が見つかった夢を、頻繁に見るようになったのは。その夢ではいつも母が真っ先に殺され、自分は最終的に、薬物漬けの廃人にされる。毎日毎日、体中あざだらけにされていたころの記憶が、フラッシュバックするようにもなった。

直と、母と、精神科医のおかげで、どうにか持ちこたえていたけれど、そんな日々が二年近く続いて……自分は、自殺を図った。

17 母の肩

猜疑心と自意識の強さは今に始まったことじゃない。

自宅のソファに横になっていた綾は、一人で自嘲の笑みを零した。

「僕、か……」

大人になってまで自分の事を僕なんて呼んでるようだと、弊害があるに決まってる。いい加減、やめないとならないけれど、この一人称は、父にここは見つからない、父にここは見つからない、という自己暗示のようなものだった。直以外の相手にはまだ、この自己暗示は有効だった。

ソファに寝転がったまま、近くに置いてあった鞆を漁り、携帯電話を、取り出した。時間を見ると、九時過ぎだった。まだ母は帰ってきていなかった。

『疑ったりしてごめん』

直にメールを送った。

五分くらいじっとしていたが、返信はない。

『助けてくれてありがとう』

違う文面で送った。やはり、返信はなかった。直が学校に来なくなった日から、二週間が経った。こんなメールだけで、解決するはずなんて、ない。

直の顔が見たかった。声が聞きたかった。小学校の時のように、『そんなこと、明日言えればいいでしょ』と返ってきてほしかった。携帯電話を閉じ、鞆に戻した。ソファにうつ伏せになった。

……小学生の時は、似たような状況でも、あんなに早く、謝れたのに。

二週間。二週間もだ。最初は、直に裏切られた思いを抱えて。冷静になってからは、直すら信じることが出来ない自分への激しい嫌悪感で。考えることをやめ、毎日を過ごしてきた。

安定剤が欲しい。依存気味なのは分かっている。それでも、欲し

くて欲しくてたまらない。発作的に立ち上がろうとする体を制止し、ソファにしがみついた。再び信頼を裏切られた母の涙を、何度も何度も頭の中で再生した。母は、薬の場所をまだ変えていないはずだ。自分を信じてくれているはずだ。探せばすぐに見つけることが出来てしまう。臓腑の奥の奥からせり上がってくる衝動を、気持ち悪さを、ソファに爪を立ててやり過ごす。

そうしているうちに、玄関の扉が開く音がした。

「ただいまあ」

母の声だった。綾はソファから立ち上がった。

ふらつきながらリビングと玄関との間の扉を開けると、母と鉢合わせした。仕事終わりに寄って来たのか、手にはスーパーのビニール袋があった。母の姿を見た瞬間、体の力が抜けた。床に座り込んだ。

「お願い。安定剤、職場に持って行って」

俯き、母の女つ気のないズボンに手をかけながら、言った。

母が近くにしゃがんだのが、衣擦れの気配で分かった。俯いた綾の首の後ろに、手がかけられた。外から帰って来たばかりの、冷たい手だった。

「そんなに、我慢できないほど、飲みたくなる？」
頷いた。

「人間として駄目なんだよ、もう。あるって分かったら、使わないといられない。ちよつと辛いことがあっただけで、薬に頼る」

「心配しないで。今は、先生に処方されている一回分だけしか置いてない。薬に頼るのは、不安を増幅させる脳内物質を抑制するためで、頻繁に使いすぎなければ、科学的な根拠がある治療法だって……。逃げとは違うつて、きちんと説明されたじゃない？」

「けど、この前、薬を探した時、お母さん、泣いてた」

かすかに母が身じろぎした。

「僕が、自殺未遂した後、一度も薬を貰いに来ないから、嬉しかったんだよね。自殺未遂したから、後悔して、何かが変わったのかも

しれないって、喜んじやったんだよね。だから、僕が、あんな……。突然、部屋中、荒らし回って、本棚ひっくり返して、食器も何枚か割って、そうまでして薬のしまってある場所を見つけたことが……。泣くほど、悲しかった。そこまで薬に依存してる僕に、失望した」

蔵本が直を責めたあの日が思い出され、自分でも、情けない声になっっていくのが分かる。

「口では先生の話信じてるふりして、お母さんも、薬に頼るのは逃げだと思ってるんだよ、やっぱり。それなら、目の前に逃げ道を示しておかないで。僕は、大丈夫だから」

母は、溜息を吐いた。綾のせいで泣いているのを認めたのかと思っただら、

「綾、それはちよつと、勘違いだと思う」

驚いて顔を上げると、母の苦笑いが目の前にあった。

「私が泣いてたのは、職場で辛いことがあつて……。それに、綾の事が加わったから、だよ。娘があんなに暴れ回った痕跡見つけたら、どんな親でも辛くなると思わない？ 娘にどんな耐えがたいことが起こったんだろう……。って。なんかもう感情が擦れちゃつてさあ、一つの理由だけで泣くなんて、できないできない。ま、綾が助かった時は泣いちゃったけど」

最後の言葉に、嬉しさがこみ上げたが、どうにか、噛み殺した。

「お母さんも、職場で？」

「ほら、介護職始めたの、離婚してからでしょ？ 今の施設で雇ってもらつてから、慣れるまで、他の職員の人にも、デイサービスに来てる人にも、疎まれちゃつてね。クビになる寸前だった。そんな時に、随分良くしてくれたおじいさんが、いたのね。最近、やつとまともに介護できるようになつてきて、その人にも、もつというんな恩返しができると思つてたら……。あの夜勤の日に、亡くなつたつて連絡を受けて……。それで、帰ったら、綾があんな状態だったから」

母が、首に回した手に力を入れてきた。母の肩に、頬を預ける形

になった。

「だから綾……。そんな穿った目で家族を見ないで。綾を大切に思う気持ちを疑われるのは、どんなことより、辛いから」

綾は堪え切れず、母にしなだれかかった。

穿った目。その通りだと思う。たった一人の家族も、一番大切な友達も、穿った目でしか見られない。まず信頼の否定から入る。信頼できるのは、何もやらなければ目に見えて数字の悪化する、部活やテストの結果くらいしかない。

バッシュがなくて綾が試合に出られなかった時、柚樹が代役を務めて強豪校に競り勝った練習試合が、浮かんた。元々、勉強とバスケット部のレベルがちょうどいいから、今の学校を選んだ。そのはずのバスケット部が弱小校に転落したのは、綾が入った年からだった。周りの部員が、綾の自殺未遂の後にあれほど態度を変化させたのは、蔵本の流した噂だけのせいでは、なかったのかもしれない。自分が、直と似た所のある柚樹以外に、全く信頼を寄せていない空気を、薄々感じていたせいだったのかもしれない。

再び負の思考スパイラルに陥りそうになり、安定剤のことがよぎった。母の背中に回した腕に、力を込めた。母の体の温もりに神経を集中させて、波をやり過ごす。

しばらくそうしたあと、

「落ち着いた？」

背中を二度、軽く叩かれた綾は、頷き、母から離れた。

立ち上がってから、母と目が合ったが、まともに見れず、床に視線を落とした。床には、母が手にしていたビニール袋が、横倒しになっていた。

「今日は久しぶりに、ご飯、一緒に作ろうか？」

そう言っ母は、ビニール袋を持ち上げてみせた。

18 父の手

ベッドの上に座り、ミュージックプレイヤーで環境音楽を聴いていた。

自分だけの世界に逃げ込んでいると、突然、静謐な音の世界に、怒声が混じり始めた。

一階での父と母の口論、だった。二階の直の部屋まで、しかもイヤホンを両耳にした状態なのに、聞こえてくる。

イヤホンを外す。外した途端、口論の内容が聞き取れるようになった。

「介護もまともにできない、何の相談もなく精神病院へ通い出す。おふくろの認知症も悪化させて、今度は直が不登校！ お前は俺にどれだけ恥をかかせれば気が済む！ どこから洩れたのか知らんが、会社のバカどもの間で噂が広がってるんだぞ！」

「なんで全部私のせいなのよ！ あなたが自分の親の介護を私ひとりに押し付けたのが最初でしょ！」

昼夜逆転の生活が回り回って、今日は、学校に通っていた頃と同じサイクルで過ごせた。そのせいで、こんな口論を聞く羽目になってしまった。

介護に疲れ果てて抜け殻のようだった母が、金切り声をあげている。

もう一度イヤホンをつけ直そうとしたが、母の反論のせいで父がいつもよりも熱くなっている気がして、できなかった。聞いていないと、何が起こるか分からない。

「俺が養ってやってるんだから当然だろう。そのくらいしないでどうする」

「仕事が忙しい忙いって言って、相談しても相手にしてくれなかったじゃない。病院の先生に相談に行って、何か問題がある？」

「なんだその口の利き方は！」

「だいたい、私だけで二人も面倒見切れるわけなんてないのよ。介護士に手伝いを頼もうとしたって、世間体が悪い、必要ないの一点張りで！ 毎日毎日あんな生活して、頭がおかしくならないほうがどうかしてる……！ 私が弱ってるのを見て、あなた、一回でも介護を手伝った？ 手伝ってないわよね？」

そこで、何かが割れるような、大きな音がした。直は身を縮め、布団を引き寄せた。母は黙り込んでしまった。

「言い訳はもういい！ ふざけやがって！ 直の不登校が決定打だ！ 来年度中の昇進はもうない！ これほど家庭内に問題の多い奴、誰も推薦なんてしない！」

また大きな音がした。扉の閉まる音が続く。そして、階段を上がってくる音。どんどん近づいてくる。直は咄嗟に、布団へ潜り込んだ。

部屋の扉が開けられた。

「おい！ お前、いつまでそうやってるつもりだ！ そんなに俺が気に入らないか。そんなに俺の事が憎いか。そうやってれば俺がいつまでも養ってくれるとも思ってるのか！」

体を縮め、耳を塞ぐ。布団がひきはがされた。腕を引っ張られる。「立て！」

目を強く閉じ、めいいつぱいベッドに重心を傾けるが、今までにないくらいの力が腕にかかり、背中から床に落ちた。息が詰まった。そのまま、引きずられていく。

強い恐怖を覚えたと同時に、中学一年の光景が瞼の裏によみがえった。廊下をこういう風に引きずられて……それから、美術準備室に。

もうすぐ階段なのに、父は腕を掴んだまま離さない。そのまま、階段を下り始めた。直は引きずられたままだった。階段の角に、背中や頭を何度もぶつけた。皮膚も激しく擦れて、痛みが走った。そして一瞬の浮遊感のあと、今までで一番の衝撃が背中と後頭部を襲った。しばらく息ができず、苦しみ呻いた。顔をしかめながら目を

開けると、父がこちらを見下ろしていた。階段がすぐそばにあった。階段の途中から、階下に放り投げられたようだった。

髪を掴まれ、無理矢理体を起こされた。

髪を掴まれ、無理矢理体を起こされた。

「泣いたって無駄だ。行くなら、明日から学校に行け。行かないなら、すぐに家から出て行け」

『今さら泣いたって無駄だから。やめてほしければ、学校に来なきゃいいんだよ』

父の顔が、こちらを覗きこんでいた。

何人かの女の顔が、こちらを覗きこんでいた。

「学校に行くか、家を出るか。どっちにするんだ？」

『学校をやめるか、この生活を続けるか。どっちがいい？』

学校に行けば、蔵本の容赦のない攻撃が再開される。きっと、退学するまで。綾だつて自分を疑ったままで、誰も助けてなんてくれない。学校に行かなければ、家を追い出される。

学校に来れば、こいつらは容赦しない。いじめはますますエスレートする。学校に来なければ、父に激しい叱責を受ける。

「行かない」

『やめない』

髪を掴んだまま、父は、立ち上がった。

髪を掴んだまま、女は、立ち上がった。

腹部に今も残る、大やけどのあと。風呂に入るたび、鏡に映る、その汚らしい残滓。医者に見せたことのない焼け爛れた傷跡。弱い人間の、烙印。

「嫌ああああ！ 嫌！ 嫌！ やめて！ 押しつけないで！ なんで笑ってるの！ 外して！ 熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱いからあつて！ もうしない、生意気だったなら謝る、何でもするから、もうやめて！ やめるから！ 学校やめるから、燃えてるの、どけて！」
女たちの手は外れなかった、父の手は外れた。父を玄関のほうに突き飛ばした。

腹を押さえながら走った。服を着たまま脱衣場を通り過ぎ、そのままシャワーに取り付いた。一番冷たい水にして、頭から冷水を被った。上だけ脱いで下着姿になり、腹にシャワーのノズルを押しあてた。冷たい。冷たい。冷たい。これで、だいじょうぶ。腹からノズルを離し、シャワーを上部に固定した。

そのまま、冷水を頭からかぶり続けた。ふと鏡を見ると、唇が紫に変色していた。

これで大いじょうぶ。これで痕は残らない。

父が風呂場のドアを押しあけた。下着姿を見られたが、気にならなかった。だって、これで、だいじょうぶなんだから。

父が、直の手からシャワーを奪い、冷水を止めた。そしてこちらを見た父の視線は、腹部に集中した。父はそれからすぐに自分の着ていたワイシャツを脱ぎ、被せてきた。そしてなぜだか、強く、抱き寄せられた。父が自分から触れてきたのは、久しぶりだった。

「何だ？ 何なんだ、さっきのパニックは。その腹の傷は……」

父の声がかすれていた。そこに怒りは読み取れなかった。

温かい人間の体を感じたら、急に、寒気が激しくなった。気温はもう、冬の装いだった。力を抜いて、やや骨ばった父の胸に、体を預ける。

そうしているうち、徐々に、記憶と現実の混線が、ほどけていった。

「中学の頃、いじめられてて、つけられた傷」

「お前、そんなこと、一言も！」

「先月、人差し指の骨、折ったのも……本当は、部活が原因じゃないくて」

ひどくべたついているはずの髪の毛に、父の手が割りこんできた。より強い力で抱き寄せられた。息苦しくなり、言葉を切らざるを得なかった。

耳元で、何度も何度も、謝罪の言葉が繰り返された。

母は、直が引きずり回されたのでパニックになっていたが、寒さに震える直が風呂場から出て行くと、すぐに、着替えを用意して、居間にあるヒーターの温度を上げ、しばらく体をさすったりしてくれた。父はその間、母に対しても、何度も謝罪の言葉を口にした。どうかしてたんだ、と何度も何度も弁解めいた謝罪を繰り返した。普段は厳格なイメージのある父が頭を下げ続けるその姿は、プライドも何もなく、非常に情けないもので、母も毒気を抜かれてしまったようだった。

やがて、家族揃っての大喧嘩の心労でか、母が疲れた表情を見せ始めたので、

「後は俺がやる」

と、父がやや強引に寝室へ連れていった。

直はその間、ダイニングテーブルに座り、父が用意してくれた温かいコーヒーを啜った。服も着替え、暖房の利いた部屋でそうしてあるうち、だんだんと、寒気もなくなっていた。

なぜだか丸く収まりかけている。直はまた一口、コーヒーを啜った。

蔵本が脅しの材料のように使った「中学時代のトラウマを抉り出す」ということを、ほんの三十分ほど前、父にされたばかりだった。それなのに父は、突然、直を抱きしめたり、パニックになった直を、それにいじめの傷跡を見て、声をかすれさせたりと、突飛な行動を取り、こちらを翻弄している。現実世界と混線したほど鮮明に残っている中学時代のトラウマが、家族の体温の前では、予想以上にあつさりと、熱を失っていったのにも驚いたが、父の意外な行動に対する驚きのほうが、今は、上回っていた。

仕事人間で、ろくにコミュニケーションも取ろうとせず、寝たきりひとりに認知症ひとりの介護は母と娘に任せきり。世間体や慣習に囚われて、母の精神病院への通院や、介護施設の手助けを借りることも許さないような、人間なのだ。普段の父は。それが、今夜は、明らかにおかしい。

それとも、と直はコーヒーを啜る。父の事を誤解していたのは、こちらのほうなのだろうか。

いじめられている、などと言えば、お前に原因がある、自分で何とかしろ、と断罪されそうな気がして、ずっと、言い出せなかったけれど、あのかすれ声は……演技とは思えない。自分は何か、大変な思い違いをしていたんじゃないか……。

コーヒーを飲み干したら、父が居間に戻ってきた。

「あーそのーなんだ。さつきは、成り行きとはいえ、その、急に風呂場に入ったりして、悪かったな。まさか下着になってるとは思わなくて」

……こんなことを言う人だったか？

改めて父との会話を思い浮かべてみようとしたが、ここ何年か、まともに会話をしていなかったことに、思い至った。寝る前には帰って来ず、朝起きればもういない。そんな生活を、ずっと、繰り返してきた。

「別に、気にしてない」

「そうか……」

父はそう言うと、直から目を逸らして小さく唸った後、テーブルに置いてあるリモコンを手を取った。父はそれをテレビに向けかけて、やめた。また唸る。

「何？」

テーブルに肘を突きながら訊くと、父は溜息をついて、直の正面に座った。

「さつきはあんな手荒な真似をして、済まなかった。最近、会社でな」

「もう聞いた」

「そ、そうだな」

「だから、何？」

「いじめのこと、なんだが」

「うん」

「先生には、相談したのか？」

「相談するも何も、加害者だと思われてるし」

直は、自分が不登校に至った経過を、何気なさを装って父に語った。母相手なら、とても冷静に語れなかっただろうが、距離感のある父だから、むしろ、落ち着いて、他人事のように話すことが出来た。

父は目を瞑って俯き、聞いているのかいないのかよく分からなかったが、相槌が欲しい所で、ときどき首が上下に動いた。

話が終わったとき、父はようやく目を開き、直をまっすぐに見つめてきた。まともに目があつたことすら、久しぶりで、妙に気持ちが悪く落ち着かなかった。

「中学時代も、一人で耐えてきて、今も、一人で耐えようとしてたんだな」

そして父親みたいなことを言い出すものだから、目鼻の奥が痛くなった。

「すまなかった」

駄目だ、と直感した。

これ以上、踏み込ませたら、こちらの弱みにつけ込んで、今までの事を全て、うやむやにされる。それだけは駄目だ。絶対に、許してはいけない。

「やめてよ、今さら！」

立ち上がり、父を見下ろして怒鳴った。

「散々、家のこと、放っておいてさ。こう言う時だけ、善人面？」

あんたのせいでお母さんがあんな状態になったのに？ 実の両親だからってあんたが甘い態度取ってるから、あのジジイがつけあがるんでしょ？ 痛めたのは下半身だけで、言葉だけは達人。あいつの口にタオル詰め込んでやろうって思ったこと、何回あると思ってるの？ ふざけんなよ。本当にふざけんな。お前の昇進なんて知るかよっ！」

父の口もとが、歪んだ。

ほら。

どうせまた、さっき母に対してぶつけたみたいに、自分勝手な怒りを、吐き出すんだろ？

早く、化けの皮を剥いで見せろ。

父は、口もとを歪めたまま、じっと、直を見つめてきていた。

「そっちが会社のことばかり考えてる間に、私は……私はさあ！一生消えない傷つけられて、一人で遠くの病院行って、お年玉まで使って治療費払って……。ねえ、馬鹿みたいでしょ。いじめられてることで、あんたに人格を否定されるのが恐くて、必死に、隠してたんだよ……」

しかし、うやむやにさせないように、父を怒らせようとしていたはずなのに。吐き出す言葉が、自分でもうまく制御できない。

「何で相談しなかったって、言う方は気楽でいいよ？でも、母さんはあんな状態だったし、家にいる時のあんたはいつも死にそうな顔してたしさあ、言えるわけないよ……」

目から零れ落ちそうになるものを必死に堪え、父を睨んだ。

泣いたら、全部、無かったことになる。祖父の罵声を浴びた母が、何を言い返すこともできずに介護部屋の隅でうずくまっていたことも、外へ必死に何かを探しに行こうとする祖母に対し、母が泣きながらすがりついたことも、母がそんな状態になってしまったせいで、いじめの事実を家族に伝えられなかった自分がいたことも、全てが、なかったことになる。

「直」

「どうして急に、父親みたいな態度！さっきまで、腕引つ張って家中、引きずり回してたのに！そのせいで、中学時代のことなんか、思い出したのに！」

父も立ち上がった。抑えが利かず、立ち上がったばかりの父に対し、右の拳を叩きつけていた。父は、殴られてやや顔を傾けたまま、言った。

「すまない」

更に一発殴ろうとすると、今度は軽く、左手で、受け止められた。
「俺はここ何年か、自分の事だけしか考えて来なかった。だから、お前の苦しみは、分らない。でも俺は、五十年近く生きてきて、お前みたいなパニックを起こした人間を、初めて見た。いじめが、お前にとって想像を絶する苦しみだったということを、想像すること、できる」

そのまま、抵抗、しなかった。

父の左手の掌に包まれた右手は、人差し指の骨折が治っていなかった。痛みが右手を支配していた。

それを、父の手が包みこんでくれていた。

「明日から、今の高校には、行かなくていい。お前がこれ以上、苦しむ必要は、どこにもないんだ」

静かに、頷いた。

またひとつ、敗者の烙印が焼き入れられた気がした。

そして、

「父さん、どうしたら、人とうまく付き合えるのかな」

気付けば、馬鹿みたいに甘えた声を、出していた。

「もう、いじめられるのは、やだよ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6416t/>

届いてください

2011年11月18日03時22分発行